

# 草津川改修事業に伴う埋蔵文化財 発掘調査概報 2

——御倉・北萱地区——

1987

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

# 草津川改修事業に伴う埋蔵文化財 発掘調査概報2

——御倉・北萱地区——

1987

滋賀県教育委員会  
財団法人滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました草津川改修事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯 田 志農夫

## 例　　言

1. 本書は県土木部の実施する草津川改修事業に伴う、草津市矢橋町所在、草津川関連遺跡北晉地区的発掘調査概要報告書で、昭和61年度に発掘調査し、当年度に整理したものである。
2. 本調査は県土木部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては草津市教育委員公の多大な協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基き、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口　宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
埋蔵文化財係主任技師	葛野　泰樹
管理係主事	山本　徳樹

財団法人 滋賀県文化財保護協会

理　事　長	南　光雄
事　務　局　長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
埋蔵文化財課調査三係長	兼康　保明
埋蔵文化財課調査三係　技師	三宅　弘
総　務　課　長	山下　弘
総務課主任主事	松本　暢弘
総務課主任主事	立入　裕子

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者、調査三係技師三宅　弘を中心として、秋政久裕、山下勝利、松本欣也が行い、執筆者名は文章の末尾に付した。
7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

## 目 次

I 位置と環境 .....	1
II 調査 .....	3
1 調査に至る経過 .....	3
2 調査経過 .....	3
III 遺構	
1 B IV トレンチ .....	4
2 A トレンチ .....	5
3 B II-1 トレンチ .....	9
4 B III-1 トレンチ .....	10
5 小結 .....	11
IV 遺物	
1 土器 .....	12
2 木器 .....	20
3 石器 .....	25
4 土鍼 .....	27
5 古鏡 .....	27
6 その他 .....	27
7 小結 .....	28
V まとめ .....	29
VI 付論 .....	30

## I. 位置と環境

今回の調査区である草津川南西部は、大津市南部から東東町へかけて連なる瀬田丘陵から流出する中小河川（草津川・伯母川・北川・十津川・狼川）の堆積活動が作り出した沖積低地にある。この地域の歴史的背景を観るには、中小河川の活発な活動に伴う人々の生活様用の変化を知ることが不可欠であると思われる。そこで、以下今回の調査区を取り巻く歴史的背景について触れてみたい。

先史時代の遺跡は現在においてさしたるもののは発見されておらず、湖成段丘上に位置する觀音堂遺跡、野路小野山遺跡、湧済谷遺跡、狸山遺跡等から縄文時代の打製石器が出土しており、沖積低地の拡がる西部においては、北山田遺跡、矢橋湖底遺跡で縄文中期の土器が出土している程度で、弥生時代に至ってはみるべきものは一つもない。

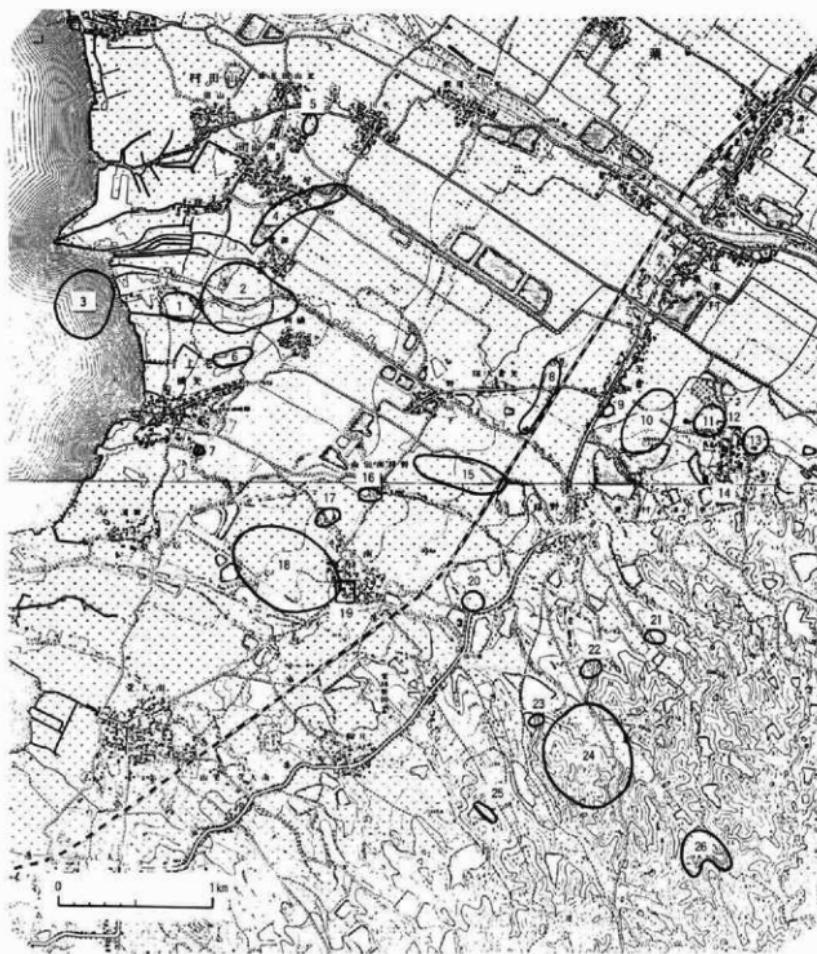
古墳時代に入るとこの地域は、古墳を中心として大きく開発されるようになる。草津市内の古墳は、古墳が築造されている場所からおおまかに二つに分けられ、一つは、草津市東南部の笠山（南笠町）から追分町、山寺町一帯に及ぶ洪積丘陵北端部やその延長部に立地するもので、もう一つは西方の平坦な平野部にみられるものである。市内で最古の古墳とされる追分古墳（円墳10数基）や北谷1号墳（前方後円墳）北谷1号墳（円墳）はいずれも前者の立地に属している。近江で最も古い古墳としては、安土町の瓢箪山古墳や大津市の皇子山古墳などがあげられる。これらの古墳を造営しむるほどの大きな力を持った首長が成長してくる背景には、草津川や伯母川、狼川流域の平野部で、弥生時代から始まった農業経営がある程度安定してきたということが言えるのである。

この首長墳に続く5世紀代の古墳に南笠古墳群（前方後円墳2基、円墳1基、「栗太郡志」によると合計22基あった）があげられ、草津市内では、前方後円墳あるいはその可能性の高い墳丘が有力首長墳の系譜をたどると考えられている。6世紀から7世紀にかけての後期古墳は、横穴式石室を持つ古墳が一般的でその分布は丘陵地に北谷古墳群（2～10号墳）その西に都田古墳群（円墳7基）追分北古墳（円墳）へソ塚古墳（円墳）三ツ塚古墳群（全塚かつて円墳96基）があり、平野部では矢倉古墳群（円墳3基）南出山古墳群（全塚）五条古墳群（円墳2基）などがあげられる。これら後期古墳はこの時期の家族形態である家父長制の共同体の家父長層を葬ったものとされており、これらの変化を見ると従来地域農業技術が家父長制的世帯共同体の所有に移行していったと考えられるのである。

これら古墳に対して集落跡は沖積低地上に西海道遺跡があり丘陵先端部から低地上にかけての微高地に御倉遺跡、狹間遺跡、坊主東遺跡があげられる。

白鳳時代になると觀音堂庵守跡、花摘寺庵守跡、片岡庵守跡、人般若寺跡、宝光寺跡、大悲寺遺跡など各地に壮大な寺院が建立されていたことがうかがえる。このような建造物の拡大に照応して笠山遺跡のような生産遺跡もあらわれてきた。

奈良時代以降になると丘陵部に大規模な集落と生産遺跡が數多く見られるようになる。集落跡としては岡田追分遺跡、矢倉口遺跡、野路岡田遺跡等から掘立柱建物、井戸などの遺構がでている。散布地として狸山遺跡、広野遺跡があり、生産遺跡として野路小野山遺跡、木瓜原遺跡、三池遺跡から炉跡、炭窯跡等が検出されている。こうした諸遺跡の集中は、この地域が瀬田川左岸にあった近江国府の影響を受け、政治、経済そして東海、中部、北陸地方から畿内への山入口として交通上にも重要な位置にあった為であり、岡田追分遺跡などの建物群はこの地方におけるこのような中心地の影響を大いに受けたものと思われる。この様に当調査地である草津市南西部においては中小河川の堆積活動などの地理的要因とそれにともなう



- |          |          |           |           |           |
|----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 北流進跡   | 6 犬間道路   | 11 ハツ塚古墳  | 16 南田山古墳群 | 21 雷山進跡   |
| 2 濱倉進跡   | 7 大寺寺道跡  | 12 園田追分道路 | 17 南笠古墳群  | 22 清流谷進跡  |
| 3 矢橋周迄進跡 | 8 矢倉古墳群  | 13 大持承進跡  | 18 西海道進跡  | 23 聰音堂進跡  |
| 4 南山田古墳群 | 9 坂上東進跡  | 14 馬分古墳   | 19 室寺庵寺道跡 | 24 三少塚古墳群 |
| 5 五条古墳群  | 10 矢倉口進跡 | 15 野路園田道路 | 20 広野進跡   | 25 三池進跡   |
|          |          |           |           | 26 木瓜原進跡  |

第1図 進跡位置図

人々の生活様式の変化を把握することが各時期の社会を適確にとらえるのにかかせないものと思われる。  
(三宅 弘・松本欣也)

## II. 調査

### 1. 調査に至る経過

新草津川改修事業に伴う新河川流域内の遺跡における発掘調査は、昭和59年度に始められている。昭和60年度にはBⅡ、BⅢトレンチが調査され、概要報告書が刊行されている。昭和61年は浜街道以西の北萱遺跡に相当する地域の発掘調査を総て終了させるべく取り組まれた。本書は、昭和61年度に発掘調査が行われた地区の概要報告書である。尚、今回は前年度で掲載できなかった木器及び石器、土鍤、古錢等の実測図や拓本も合わせて掲げている。

### 2. 調査経過

前年度に設置されたBⅡ、BⅢトレンチの間にBⅡ-1トレンチ、BⅢトレンチの東にBⅢ-1、BⅣトレンチを、北川右岸のBⅣトレンチに対応する所にAトレンチを設定した。Aトレンチの東端は、浜街道に隣接している。

BⅣトレンチは、東西97.5m×南北16~40mの台形を呈している。BⅡ-1、BⅢ-1トレンチは、合わせて東西119m×南北50mの長方形を呈するが、幅14m程のBⅢトレンチを挟んで東西に位置するため、BⅢトレンチも含めて掘り下げられた。B地区では、バックホーにより表土から2.5m掘り下げた所で上層遺構面が露出している。下層遺構面はそれより0.5~1m以下で検出された。A地区では、南東から北西に延びる北川に沿って長さ116m、幅15mのトレンチを設定し、遺構が認められた西半分について括げた。そのため拡張部分は長さ66m、幅23mの不整五角形を呈している。ここでは表土より1.8mで上層遺構面が、そこから約0.3mで下層遺構面が検出された。

(三宅 弘)



第2図 磨石と石皿

### III. 遺構

#### 1. BIVトレンチ

浜街道の西約60~150mの所、本調査対象地の南東部に位置するBIVトレンチからも、2層の遺構が検出された。上層遺構面は、バックホーによる掘削が2.5mに及んだ所で、暗灰褐色粘土をベースとしている。下層遺構面はさらに1m下位の青色粘土をベースとして、それを切り込む遺構が検出された。

##### a 上層遺構 図版23

###### (1) 旧河道2

中央部を南から北に流れる形状を呈する。トレンチを縦断するため、両端は未検出であり、全長30.7m以上、幅1.9~42mを測る。上流と下流の高低差は28cmであり、深さは最深部で27cmを測る。覆土から縄文時代の土器片、平安時代後半頃の土師器や瓦器の皿、椀が出土し、また木製遺物として、農具、踏み鉗などが出土している。

##### b 下層遺構 図版24

下層では、土壤32基、旧河道1条が検出された。

###### (1) 土壙群

S K 1 トレンチの南西端に位置し、1.6m×1.4mの円形を呈する。深さは24cmを測る。

S K 2 S K 1 の南に直径1.5mの円形を呈した土壤が検出された。深さは25cmである。

S K 3 S K 2 の南東に位置し、1.9m×1.2mの長楕円形を呈する。深さは22cmを測る。

S K 4 S K 2 の東に位置し、直径0.9mの円形を呈する。深さは25cmである。

S K 5 S K 4 の北に1.8m×1.0mの長楕円形を呈した土壤が検出された。深さは32cmである。

S K 6 S K 5 の南東に、直径1.6mの円形を呈した土壤が検出された。深さは19cmを測る。

S K 7 S K 6 の北に位置し、1.3m×1.2mの円形を呈する。深さは22cmである。

S K 8 S K 5 の北に位置し、2.4m×1.3mの長楕円形を呈する。深さは23cmである。

S K 9 S K 8 の北に1.7m×1.5mの円形を呈し



第3図 BIVトレンチ上層旧河道2



第4図 BIVトレンチ下層全景

た土壌が検出された。深さは13cmを測る。

S K 10 S K 9 の南東に位置し、1.7m × 1.2m の楕円形を呈する。深さは12cmである。

S K 11 S K 10 の南東に位置し、北部を S K 12 に切り込んだ形で検出された。1.8m × 1.4m の楕円形を呈し、深さは26cmを測る。

S K 12 S K 11 に南部を切り込まれていて未検出であるが、1.3m × 1.2m の円形を呈すると考えられる。深さは13cmである。

S K 13 S K 12 の東に1.9m × 1.4m の楕円形を呈した土壌が検出された。深さは23cmを測る。

S K 14 S K 13 の南東に位置し、2.1m × 1.6m の楕円形を呈する。深さは35cmを測る。

S K 15 S K 12 の北に位置し、1.5m × 1.1m の楕円形を呈する。深さは24cmを測る。

S K 16 S K 15 の東に、1.9m × 1.4m の不整楕円形を呈した土壌が検出された。深さは40cmを測る。

S K 17 S K 16 の北東に位置し、1.4m × 1.0m の隅丸方形を呈する。深さは26cmを測る。

S K 18 S K 17 の東に位置し、1.3m × 1.0m の楕円形を呈する。深さは25cmを測る。

S K 19 S K 15 の北に、1.8m × 1.3m の楕円形を呈した土壌が検出された。深さは25cmを測る。

S K 20 S K 19 の東に、2.0m × 1.3m の不整楕円形を呈した土壌が検出された。深さは41cmを測る。

S K 21 S K 20 の北東に位置し、1.0m × 0.9m の円形を呈する。深さは32cmを測る。

S K 22 S K 21 の西に、2.6m × 2.4m の円形を呈した土壌が検出された。深さは40cmを測る。

S K 23 S K 22 の北西に位置し、1.3m × 1.2m の円形を呈する。深さは41cmである。

S K 24 S K 23 の東に位置し、2.5m × 2.1m の隅丸方形を呈する。深さは35cmを測る。

S K 25 S K 14 の東に、1.3m × 1.2m の円形を呈した土壌が見られる。深さは30cmを測る。

S K 26 S K 25 の北に位置し、1.6m × 1.5m の円形を呈する。深さは31cmを測る。

S K 27 S K 25 の南東に位置し、1.0m × 0.9m の円形を呈する。深さは17cmである。

S K 28 S K 27 の北に、直径1.7m の円形を呈した土壌が検出された。深さは37cmを測る。

S K 29 S K 28 の南に位置し、0.8m × 0.9m の円形を呈する。深さは34cmを測る。

S K 30 S K 27 の東に位置し、直径1.2m の円形を呈する。深さは65cmを測る。

S K 31 S K 30 の南東25.2m のところに、1.6m × 1.4m の長方形の土壌が検出された。深さは30cmを測る。

S K 32 S K 31 の東に位置し、1.2m × 1.1m の方形を呈する。深さは39cmを測る。

## (2) 旧河道 1

トレンチの北岸にそって、南東から北西へ流れる形状を呈する。北岸は未検出であり、全長はトレンチを横断するため不明である。全長87.5m以上、幅9.4m以上、最深部で1.54mを測る覆土中より、4～6世紀を中心とした多量の遺物が出土した。Ⅲ河道 2 が平安時代の遺物の時代幅は縄文時代後期から、古墳時代後期に及ぶ木製造物として堅件が出土している。

## 2. A トレンチ

浜街道のすぐ西側、本調査対象地の北東部に位置する A トレンチからは、遺構が 2 層にわたり検出された。バックホーによる掘削が 1.8m に及んだところで、暗灰褐色粘土層をベースとした上層遺構面が確認された。下層遺構面はさらに 0.3m 下った所で青色粘土をベースとし、東端を除く全面にわたり認められる。また、地形に沿って遺構面も東から西へゆるやかに傾斜している。

### a 上層遺構 図版1. 25

上層では柵が2列、土壙10基、溝11条が検出された。

#### (1) 柵

S A 1 トレンチ中央東寄りにほぼ東西に直列し、掘形は直径20~50cmの梢円形を呈し、0.5~1.0mの間隔で杭が10個並んでいる。

S A 2 S A 1 の南側に位置し、同じく東西に直列している。掘形は、直径30~50cmの梢円形、もしくは長梢円形を呈し、0.25~1.0mの不等間隔で杭が12個並んでいる。

#### (2) 土壙群

S K 33~34 トレンチの北端に位置し、東西に重複している。S K 33は1.0m×0.85mの梢円形を呈し、深さは6cmを測る。S K 34は西部をS K 33に切られていて、1.46m×0.75mの長方形を呈し、深さ50cmである。

S K 35 S K 33の南に位置し、S D 3を切り込んだ形で検出されている。1.46m×1.08mの長梢円形を呈し、深さは30cmである。

S K 36~37 S K 35の南~南東に位置し、S K 36はS D 4を切り込んだ形で検出され、1.16m×1.14mの変形隅丸方形を呈している。深さは42cmを測り、底面は中央部がくぼんでいる。S K 37はS D 4に接し、1.14m×1.04mの方形を呈し、深さは29cmを測る。

S K 38 S K 33の南東に位置している。トレンチの北端に接するため、北部は未検出である。5.9m×3.8mの不整台形を呈し南西部に長梢円形の段を有す。深さは30cmで、覆土より平安時代末頃の瓦器碗が出上している。

S K 39 S K 38の南西に位置し、S D 5に北部を切り込んだ形で検出された。5.75m×2.3mの変形長梢円を呈し、底部は中央がくぼみ、深さは最深部で28cmである。

S K 40~41~42 S K 39の南西、S D 9の南岸下位に位置する。S K 40、41は重複するが先後関係はない。直径または一边が、0.78~1.08mの円もしくは、方形を呈し、深さは8~44cmを測る。S K 42は、S K 41の南西に位置し、1.0m×1.1mの円形を呈し、深さは42~45cmを測る。

#### (3) 溝

S D 1 トレンチ西部を北西から南東にやや弯曲して流れる形状を呈し、下流でS D 9、10に重複している。全長29.5m以上、幅1.02~5.9mを測る。深さは最深部で37cmを測る。

S D 2 S K 34の東に南北に流れる形を呈する。全長3.4m以上、幅1.03m、深さ16cmを測る。北方は未検出である。

S D 3 S D 2 の南を北東から南西へ流れる形状を呈する。全長8m以上、幅39cm、深さ8cmを測る。南西部はS D 1に切られ未検出である。

S D 4 S D 3と平行する。南西約2mのところに位置し、西岸中部はS K 36に切り込まれている。全長13.46m、幅0.2~0.46m、深さは6cmである。

S D 5 S K 38の南に東西に流れる形状を呈し、中位でS D 6を切り込んでいる。全長19.15m、幅0.4m×1.5mを測り、西へ向って狭くなっている。深さは最深部で19cmであり、覆土より黒色土器の碗が出土している。

S D 6 S D 5の南岸中位から南北に流れる形状を呈し、北端をS D 5に、南端をS D 7に切り込まれている。全長4.67m、幅24~69cmで、深さはほぼ10cmである。また、覆土より黒色土器碗が出上している。

**S D 7** S D 5 の南を北東から南西に流れる形状を呈し、南端は S D 9 に切り込まれ、未検出である。下位で S D 6 の南端を切り込んでいる。全長 5.1m 以上、幅 42cm、深さは 7cm を測る。

**S D 8** S D 7 の東を南北に流れ、途中 S D 9、10 に切り込まれつつ、南に向かい、S A 1、2 を垂直に横切る形状を呈する。全長 16.9m、幅 14~70cm、深さは最深部で 15cm を測る。

**S D 9** 北東端から南西に向い、S D 10 に切り込まれつつ、くの字形に弯曲する。ほぼ西方に流れ、下位で S D 1 に切り込まれる形状を呈する。両端は未検出であり、全長 47m 以上、最大幅 7.8m、深さは最深部で 26cm を測る。覆土より、4~6 世紀の土器や須恵器が出土している。

**S D 10** S D 9 の東から西へ S D 9 を切り込みつつ重複して流れ、下流で S D 1 に切り込まれる。全長 52m 以上、幅 0.6~1.3m、深さは最深部で 14cm を測り、覆土中より弥生時代の甕が出土している。

**S D 11** S D 8 の東をほぼ平行に流れる形状を呈する。全長 4m、幅 2.7m、深さは 6cm を測る。

b 下層遺構 図版 2, 26

下層では、土壙 44 基、旧河道ないし溝 6 本が検出された。

(1) 土壙群

**S K 43** S K 13 の南西に位置し、北東部は未検出である。1.66m × 0.76m の不整形を呈している。中央に段を有し深さは 81cm を測る。

**S K 44** S K 43 の西に 1.2m × 0.92m の半梢円形を呈する。北部に長梢円形の段があり、最深部で 32cm を測る。

**S K 45** S K 44 の南西に位置し、0.86m × 0.82m の弧形を呈する。深さは 77cm を測る。

**S K 46** S K 45 の南西に、0.56m × 0.52m の円形を呈する。深さは 46cm を測る。

**S K 47** S K 46 の南に位置し、1.68m × 1.22m の不整梢円形を呈している。中に段を有し、最深部で 75cm を測る。

**S K 48** S K 47 の南面に接する形で 1.56m × 1.26m の半長梢円形を呈している。北東部に三角形の段があり、最深部で 81cm を測る。

**S K 49** S K 48 の南西に位置し、南西部は未検出であるが、2.59m 以上 × 2.10m の梢円形を呈すると考えられる。東、西部に段を有し、最深部で 53cm を測る。

**S K 50** S K 49 の東に、北東部に段を有した、1.30m × 1.06m の隅丸三角形の土壙が検出された。最深部は 43cm を測る。

**S K 51** S K 48 の東に、1.60m × 1.32m の二角形を呈した上層が検出された。二ヵ所の段を有し、最深部で 89cm を測る。

**S K 52~53** S K 51 の南に重複した形で検出された。先後関係は不明であり、S K 52 は、2.70m × 2.12m の梢円形を呈し、東部に段を有し、ピット状の落ち込みが見られる。深さは 15cm である。S K 53 は、1.32m × 1.08m の不整円形を呈し、深さは 68cm を測る。

**S K 54** S K 53 の西に位置し、1.28m × 1.08m の台形を呈す。南西部は未検出であり、深さは 48cm を測る。

**S K 55** S K 54 の南東に、南西部が未検出の 1.62m × 0.82m 以上の長方形の土壙が検出された。中に段を有し、最深部で 32cm を測る。

**S K 56** S K 52 の南東に、2.42m × 2.32m の円形を呈した土壙が検出された。中に 2 段を有し、最深部は 49cm を測る。

- S K57 S K56の南東に位置し、 $1.52m \times 1.50m$ の円形を呈し、南部に段を有す。最深部で57cmを測る。
- S K58 S K57の南西に位置し、南部は未検出であり、 $1.50m \times 1.40m$ 以上の不整方形を呈する。中に落ち込みが見られ、最深部で10cmを測る。
- S K59 S K58の南東に南西部が未検出の $1.10m \times 1.62m$ の不整長方形を呈した土壌が検出された。中に段を有し、北西部に落ち込みが見られる。最深部で46cmを測る。
- S K60 S K59の南東に位置し、南西部が未検出の $1.56m \times 1.46m$ の不整形を呈する。深さは37cmを測る。
- S K61 S K60の南部に接する形で南西部が未検出の $2.86m \times 1.32m$ 以上の不整形の土壌が見られる。深さは50cmである。
- S K62 S K60の南東に、 $1.94m \times 1.40m$ の不整長方形を呈した土壌が検出された。深さは29cmを測る。
- S K63 S K62の南に位置し、 $1.56m \times 1.32m$ の不整円形を呈する。中に段を有し、深さは47cmを測る。
- S K64 S K63の北東に、 $1.16m \times 1.10m$ の円形の土壌が検出された。中に段を有し、ピット状の落ち込みが見られる。深さは46cmを測る。
- S K65, 67 S D14の北に散在する。 $1.26 \sim 2.06m \times 0.5 \sim 0.96m$ の楕円形を呈し、深さは、各々8~12cmを測る。
- S K68 S D14の南に位置する直径72cmの円形を呈し、深さは8cmを測る。
- S K69 S K68の南に位置し、 $0.9m \times 1.2m$ の変形隅丸方形を呈する。深さは7cmを測る。
- S K70 S K69の南西に位置し、 $3.01m \times 0.62m$ の不整長方形を呈し、深さは8cmである。
- S K71, 72 S K70の南東に列んでいる形で検出された。各々、 $1.48 \sim 2.02m \times 0.54 \sim 0.78m$ 、長椭円形を呈し、深さは両方9cmを測る。
- S K73 S K72の南西部に接する形で $0.73m \times 1.03m$ の楕円形の土壌が検出された。深さは14cmを測る。
- S K74 S K72の南東に位置し、西部をS K75に切り込まれていて、 $0.96m \times 0.71m$ 以上の楕円形を呈すると考えられる。深さは21cmを測る。
- S K75 東部でS K74に、南部でS K76を切り込んでいて、 $1.84m \times 1.48m$ の楕円形を呈する。深さは55cmである。
- S K76 北部をS K75に、南部をS K77に切り込まれていて、一辺1.7mの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは44cmを測る。
- S K77 S K76の南部に切り込んでいて、 $2.14m \times 1.62m$ の楕円形を呈する。深さは30cmを測る。
- S K78 S K77の南東に位置し、 $1.0m \times 0.7m$ の楕円形を呈し、南部に段を有する。深さは47cmを測る。
- S K79 S K78の南東に、 $1.44m \times 1.32m$ の楕円形を呈した土壌が検出された。深さは36cmを測る。
- S K80 S D13を挟んで南西に位置し、 $1.28m \times 1.18m$ の楕円形を呈し、深さは52cmである。
- S K81 S K79の南、S D12を切り込んで重複する形で検出された。 $0.84m \times 0.6m$ の楕円形を呈し、深さは10cmである。
- S K82 S D12を挟み、S K79の南東に位置し、直径1.24mの円形を呈し、直径0.7mの同心円状の落ち込みを有している。
- S K83 S K82の南東に位置し、直径0.76mの円形を呈し、深さは9cmである。
- S K84 S K83の南東に、 $1.54m \times 0.78m$ の長椭円形を呈した土壌が検出された。底部は東部より西部に向けてやや傾斜しており、最深部で11cmを測る。

S K 85 S K84の北東部に沿った形で $0.78m \times 0.54m$ の半梢円形を呈している。深さは9cmを測る。

S K 86 S K84の南西に位置し、 $1.66m \times 1.05m$ の梢円形を呈している。底面は北西部より南東部にゆるやかに傾斜しており、最深部で23cmを測る。

(2) 旧河道4

中尖部を南から北に流れ、下流で南西、北東方向の2つに分流する河道である。両端は未検出であるが、全長58m以上、幅3.9~13.6m、最深部で1.2m前後を測る。褐色砂礫層から縄文時代の甕が出土している。

(3) 溝

S D 12 S K79と80の間を東西に流れる形状を呈するもので、上位でS K81に切り込まれている。全長8.3m以上、幅34cm、深さは17cmを測る。

S D 13 S K11の北東に平面V字型に流れる形状を呈し、全長6.5m、幅0.58~1.10m、深さは28cmを測る。

S D 14 S D13の南東に、東西流し、東端で南に曲がる形状を呈す。南端にはピット状の落ち込みが見られる。全長6.54m、幅0.5~1.20m、深さは8cmである。

S D 15 北東から南西に向い、途中S D14と接しながらくの字型に曲がり、ほぼ東方に流れる形状を呈す。S D14との先後関係ではなく、全長8.08m、幅0.5~0.94m、最深部で9cmを測る。

S D 16 S D15の南に、東西流する形状を呈す。東部は未検出であり、全長6.64m、最大幅0.6m、深さは10cmを測る。

### 3. B II-1 トレンチ

浜街道から西へ約220~290m、本調査対象地の西部に位置する。遺構はAトレンチ同様、2層検出された。上層は表十から約2.5m下った所で暗褐色粘土層を切り込む遺構(旧河道2)が検出され、下層は青色粘土層のベースを切り込んだ形で、遺構が見られる。

a 上層遺構 図版3. 27

上層では、土壙3基、旧河道1条が検出された。

(1) 土壙

S K 87 トレンチ南端に、 $13.1m \times 3.3m$ の不整長梢円形を呈した土壙が検出された。最深部で17cmを測る。

S K 88 S K87の南東に位置し、 $2.67m \times 1.78m$ の長方形を呈する。深さは33cmを測る。

S K 89 S K88の北東に位置し、 $2m \times 2.3m$ の梢円形を呈する。底部は北から南に、やや傾斜しており、最深部で17cmを測る。

(2) 旧河道2

トレンチの東から西へ向い、すぐに北西に向きを変え、再び西へ流れる形状を呈する。トレンチを横切るため、全長は不明であり、長さ73.8m以上、幅9.35~17.20mを測る。断面はU字型を呈するが、平面形はなだらかな弧形を呈する。褐色砂層より1~6世紀を中心とした多量の須恵器、土師器が出土した。その多くは摩滅がひどく、上流から運ばれて来たものと思われる。また、木器としては、踏み跡の身が出土している。

b 下層遺構 図版3. 28

下層では、旧河道1条が検出された。

### (1) 旧河道1

青色粘土層を切り込んで、東から西へ流れる形状を呈し、下流では北岸は未検出である。全長はトレンチを横断するため不明であり、長さ70m以上、幅21.2m以上、最深部で93cmを測る。また、底面から北岸に沿って西へ向い、中位で大きく幅を南北に広げる流れと、南岸に沿って、北西に向いて流れる2つの流路が見られ、河道が変化したことがうかがえる。暗褐色粘土層の覆土からは、縄文土器鉢や、古墳時代の土師器壺、甕、須恵器杯蓋、杯身などが出土している。

#### 4. B III-1 トレンチ

B II-1 トレンチの東約10m、本調査対象地の中央部に位置する。遺構は2層検出され、上層遺構面は、表土から2.5mに及んだ所で、暗褐色粘土をベースとし、下層遺構面は1m下位の青色粘土をベースとしている。

##### a 上層遺構 図版4. 27

上層では、旧河道1条が検出された。

### (1) 旧河道2

トレンチ北岸に沿って東から西へ向い下流で南西に向きを変えて流れる形状を呈する。北岸は未検出であり全長42.5m以上、幅11.9m以上を測る。下流の中程に長椭円形の中州状の段を有し、最深部で62cmを測る。上流と下流の高低差は28cmである。また、褐色砂層より、十師器皿や須恵器杯蓋、壺が出土している。

##### b 下層遺構 図版4. 28

下層では、土壙19基、旧河道2条が検出された。

#### (1) 土壙群

S K90 トレンチの南東付近に位置し、1.6m×1.2mの楕円形を呈する。深さは24cmを測る。

S K91 S K90の北西に旧河道1を切り込んだ形で、1.55m×1.15mの不整楕円形が検出された。深さは22cmである。

S K92 S K91の北西に、S K91と同様に旧河道1を切り込んだ形で十壙が検出された。平面形は、1.05m×0.65mの長椭円形を呈する。深さは18cmを測る。

S K93 S K91の南西に位置し、1.65m×1.40mの不整形を呈する。深さは31cmを測る。

S K94 S K91の南に位置し、1.80m×1.35mの隅丸方形を呈する。深さは25cmである。

S K95、96は、S K90の南西に重複して検出された。先後関係は不明であり、S K95は、2.0m×1.4mの楕円形を呈し、深さは45cmを測る。また、S K96は、1.5m×1.3mの楕円形を呈し、深さは33cmを測る。

S K97 S K96の南に位置し、1.5m×1.3mのはば円形を呈した土壙が検出された。深さは25cmを測る。

S K98 S K96の南西に位置し、1.8m×1.2mの隅丸方形を呈する。深さは21cmを測る。

S K99 S K98の西に位置し、1.4m×1.2mのはば円形を呈している。深さは28cmを測る。

S K100 S K93の西に位置し、1.5m×1.4mの円形を呈した十壙が検出された。深さは20cmを測る。

S K101 S K100の南東に位置し、2.0m×1.9mのはば円形を呈する。深さは35cmである。

S K102 S K101の南西に位置し、1.4m×1.1mの楕円形を呈する。深さは18cmを測る。

S K103 S K99の北西に位置し、1.9m×1.8mのはば円形を呈している。深さは29cmを測る。

S K104 S K103の北に位置し、1.8m×1.7mの円形を呈する。深さは29cmを測る。

S K 105 S K 100の南西に位置し、 $1.4m \times 1.1m$ の楕円形を呈した土壙が検出された。深さは26cmである。

S K 106 S K 105の北西に接した所で検出された。 $1.5m \times 1.0m$ の不整方形を呈し、深さは33cmを測る。

S K 107 S K 106の西に接した所に位置し、 $1.8m \times 1.4m$ の楕円形を呈する。深さは32cmを測る。

S K 108 S K 107の南西に位置し、 $1.5m \times 0.8m$ の長楕円形を呈している。深さは25cmを測る。

#### (2) 旧河道 1

トレンチを東から西に横断する流れと、その流れから北方へ伸びる流れがある。両端は未検出であり、全長34.6m以上、幅22.4m以上、最深部では約1.5mを測る。また、褐色砂層より、織文から古墳時代に至る、多くの土器が出土している。

#### (3) 旧河道 3

旧河道1の支流として、下流南岸へと流れている。形状は、2つの流れが合流したY字形を呈し、南から北へ流れる形態を呈している。全長は17.8m以上、幅0.9~2.8mを測る。覆土からは須恵器杯身が出土している。

### 5. 小 結

各トレンチからは、上下2層の遺構面が検出されている。B地区に設定された3つのトレンチ内を貫流するIH河道1、2はそれぞれの遺構面ごとに1つの流れとして捉えることができる。この2つのIH河道は一致するものであり、現在は、はるか高所を流れている北川のもとの流れであったと言えるであろう。また、旧河道南岸に見られる土壙群は、形状、性格共に不明である。Aトレンチでは、SD 9がほぼ東西に流れれる形態を呈しており、浜街道以西の地割りに沿う形となる。SA 1、2はSD 9に沿っており、SD 9に関連したものと思われるが、詳細は不明である。旧河道4は旧河道1に流れ込む支流であろう。

(三宅弘・山下勝利)

## IV. 遺物

### 1. 土器

各トレンチより縄文～平安時代の土器が、多量に出上しているが、特に旧河道1及び2からのものがその大部分を占める。

#### (1). BN トレンチ

##### 1) 旧河道1 (1~72) 図版5・6. 29. 32

###### 縄文土器 (1~8)

深鉢 (1・2) と壺 (3~8) が出土している。1は前期の北白川下層式と考えられ、内凸する口縁の端部に刻み目、外面直下に沈線、体部には稜形状の列点文を施している。2~8は晩期の所産と考えられ、3・5~7は端部に指ぬさえや刻み目を施し、他は丸く取めており、無文である。また、8の端部は内方へつまみ上げている。

###### 弥生土器 (9~18)

壺 (9~10)・瓶 (11~12)・壺 (13~18) に分かれる。9は短く外反する口縁部の端面に刺突列点文、頸部から体部にかけて縦ハケのうち横に櫛描直線文を施す。頸部には櫛描直線文の位置に縫を留めたであろう穿孔がみうけられる。10は外反する口縁部が受け口状に立ち上がり、端部に刻み目、その外面には櫛描波状文と棒状浮文が施されている。外面は縦方向のハケ月のうち、頸部に櫛描直線文が施される。11・12は平らな底部の中央に1孔を穿つもので、内外ともハケ目調整を施す。12の底部外面には製作時にいつたと思われる棒状の圧痕がみられる。13・14は大きく外方へ開く口縁部を有するもので、内外面ともハケ目調整を施し、13は端部上面に刻み目、14は端部外面に面をもつ。15~18は總て受け口状口縁を呈するもので、外面端部下端に刺突列点文、外面頸部にはハケ月の後沈線文を施している。9・10・13・14は中期、他は後期と思われる。

###### 土師器 (19~58)

壺・甕・瓶・鉢・高杯・器台・甕が出土している。壺 (19~28) は、19~26が小型のもので、丸い体底部から大きく外方へ開く口縁部がのびるもので、21は口縁が直立するもの、22は二重口縁状を呈するものである。調整は總てハケによって行われる。大型の壺は、27が大きく外反する口縁とやや肩の張った丸い体部をもつもので、28は二重口縁を呈するものである。調整は27がハケ目、28はナデを施している。甕 (29) は、やや扁球形気味の体部から大きく外反し口縁部がのびるもので、頸部の少し下方に焼成後の穿孔がみられる。瓶は30が直立気味にのびる口縁部、体部の外面に尖角状の把手が貼り付くもので、内外向外ともにハケ目調整を施している。31・32は逆三角形を呈する鉢形土器の底部中央に1孔を穿つもので、31は内面ヘラケズリ、外面ハケ目、32は内面ナデ、外面叩き口を施している。形式的に見て、11・12から統くものと思われる。鉢 (33) は少し丸味を帯びた平底から、内側に弯曲しつつ外方へのびる口縁部、体部をもつもので、内面端部にハケ目が認められるものの、全体的に難な作りである。高杯は、全容がわかるものはなく、杯部のみ (34~39) と脚部のみ (40~43) の破片に分けられる。杯部では、いずれも底部を明確に作られたものばかりで、36が内外面とも密なヘラミガキ調整が施されたていねいな作りであり、他はハケ目やナデ調整が施されている。脚部は、40が器高が低く、外面に縦の二段ヘラミガキ、内面に斜めのハケ目と密な調整の行われているもので、36と胎上が似る。他はラッパ状に開く脚部で、内外ともにナ

デ調整が施されている。器台（44）は、短い柱状部から大きくハの字状に開く裾部をもつもので、内外面にヘラミガキを施している。壺は、受口状口縁をもつもの（45～52）、ハの字状口縁のもの（54～58）、脚台部（53）に分けられる。受口状口縁のものは、外面頸部に沈線が巡るもの（46・50）、列点文が施されるもの（45・47・49・52）、何も施されないもの（48・51）に分けられる。46は東瀛系の壺と考えられる。脚台部（53）は、ハの字状に開く脚部の破片で、46の底部にあたるものと思われる。II縁がハの字状に開くものでは、56の端部が肥厚し、先端が内上方へつまみ上げる形態を呈し、他と異なる。57はいわゆる布留式壺である。57の内面ヘラケズリを除いて、内外はハケ目調整を施すものがほとんどである。4～6世纪のものであると思われる。

#### 須恵器（59～72）

杯蓋・杯身・高杯・壺・甕が出土している。杯蓋（59～61）は60を除いて天井部と口縁部の境に明確な波線をもつものである。杯身は、受け部と立ち上がりをもつもの（62～64）と、もたないもの（65～67）に分けられる。高杯（68）は内側する口縁部の上半で彼線を有しつつ直立気味にのび、端部はやや外反する。外面波線下にくずれた波状文を施している。壺は69がやや扁球形の体部に大きく外方へ開く口縁部を有し、その外面に2本の突線を巡らせており、文様はその突線に囲まれた部分と頭部との間に2～3条のくずれた波状文を施す。また、体部中位より少し上に3条の浅い沈線を巡らせ、その中間にハケ状工具による刺突列点文を稜衫状に施している。70は頸部以下の破片であるが、やや肩の張った球形を呈し、外面の上3分の2にカキ目、下方に平行叩きを施している。内面には下方に円弧叩き、他はヨコナデ調整である。甕（71）は肩の張った扁球形を呈する体部から、大きく外反するII縁部がのび、外面に1条の突線を巡らせており、肩部に1孔が穿たれている。内面底部に円弧叩きが見られる他はヨコナデ調整と考えられる。甕（72）は大きく広がる体部からのハの字状にII縁部が開き、端部内面をつまみ上げている。体部内外面に叩き調整が残り、他はヨコナデを施す。68～71は5世纪代のものと思われるが、他は6～7世纪のものであろう。

#### 2) 旧河道2（73～83） 図版6. 31・32

#### 土師器（73～78）

皿（73～76）は、73がての字状口縁を呈するもので、他はまっすぐに外方へのびるII縁部をもつ。碗（77・78）は平らな底部から外方へまっすぐにのびる口縁部を有し、外底面の端に高台をもつもので、77は高台が直立し、78は外方へふんばっている。これらは、いずれも平安時代中期のものと思われる。

#### 瓦器（79～82）

椀（79～81）は内面密なヘラミガキ、外面は粗なヘラミガキを残すものである。皿（82）はやや丸味を帯びた平底に短かく外反する口縁部を有するもので、内底面に簡略化された鋸歯状暗文が施されている。これらはいずれも平安時代末期のものであろう。

#### 土器片錐（83）

縦5.8cm、横4.1cmを測る楕円形の縄文土器片の上下端に切り込みを入れたものである。

#### 3) 包含層（84～127） 図版32・33

#### 土師器（84～107）

碗・杯・皿・高杯・甕が出土している。碗は、器形の浅いもの（84）と深いもの（85）に分けられる。84は全面ナデ調整、85は内面ハケ目、外面底部にヘラケズリ調整を施している。杯は、86が内側する浅い器形の底部に高台が付けられるもので、全面をヨコナデしている。87は、高台が付かないタイプで、平ら

な底部から内窓気味にのびる口縁の端部が内側に巻き込まれる形態を呈する。皿は口径が7.5~8.9cmの小皿(86~93)、12.3~15.4cmの中皿(94~98)、20cmを越える大皿(99)に分類される。小皿は全て内窓する口縁の端部が丸く收められている。中皿は、やや深めの94、外端面に強いナデのための段が残る95、端が肥厚する96・97、端部が外反する98に分かれる。なお、95は焼成後の円孔が底部中央付近に見られる。大皿は平らな底部からやや外反気味に口縁部がのび、端部は内側に少し肥厚させたものである。皿の調整は全てヨコナデであった。高杯は、杯部が椀形を呈し、脚部がまっすぐに下方へ開くもの(100)と下方へのびる、脚部が途中で大きくハの字状に開く脚部のみの破片(101)と大きくラッパ状に開く脚部の端部を下方へつまみ出した形態を呈し、柱状部に面取りを行うもの(102)がある。甕は口径が9.6~10.1cmの小壺甕(103・104)と、13~14.4cmの中型甕(105~107)に分けられる。小型甕は外面ハケ目、内面ナデ調整を施し、中型甕は内外面ともにハケ目が施されるが、105は外面下半をヘラケメリ、107は内面上半にナデ、下半は、円弧叩きを残している。これらの土器は古墳時代のものから平安時代のものまでを含んでいる。

#### 須恵器(108~115)

杯蓋・杯身・椀・甕が出土している。108は平らな大井部からZ字状に口縁部がのびるものである。109は高杯の蓋と思われ、口径12.9cm、器高5.8cmを測る完形品である。110は立ち上がりをもつ杯身、111~113は高台の付く杯身で、111・112は小型品、113は大型品で口径15.6cm・器高5.8cmを測る。114は内窓気味の体部からほぼ垂直に立ち上がる口縁部につながり、その境に直線が1条巡るもので、椀と考えられる。体部外面にくずれた波状文が施されている。115は甕の口縁部と思われ、くの字に外反しつつのびる先端は、上下につまみ出されて凹面を形成している。端部下に断面三角形の突帯を貼り付け、その下に波状文が1条巡っている。口径22cmを測る。5~6世紀のものと、8世紀後半頃のものに分けられる。

#### 灰釉(116~118)

いずれも椀の破片で、116は口縁部、他は底部が遺存しているものである。116は大きく開く口縁に外反する端部をもつもので、口径15.8cmを測る。117は薄い底部に台形の高台が貼り付けられるもので、施釉は内面体部に行われている。118は底部が厚手のもので、施釉は117と同じである。いずれも平安時代のものであろう。

#### 黒色土器(120~124)

いずれも椀である。122と124は口縁端部から高台まで遺存し、他は口縁部の破片である。120・121・124は近江型のものである。122は内面に細かい密なヘラミガキ、123は太目の粗いヘラミガキが施され、122のみ内面黒色化、他は外面口縁上半まで黒色化が行われている。

#### 瓦器(125)

椀が1点出土している。平らな底部から内窓気味に口縁部が立ち上がり、端部内面に段を持つ。高台は底部外周に断面三角形の退化したものが貼り付けられる。内面はやや密なヘラミガキ、以下は未調整で指圧痕を多く残している。13世紀前半のものと思われる。

#### 青磁(126)

口径18.6cmを測る大型碗の体部以上の破片である。内窓気味にのびる体部は、口縁端部付近でやや外反気味となり丸く收める。全面に施釉され、見込みに櫛描き界線で囲まれた刻花文が描かれている。13世紀のものであろう。

#### 手捏ね土器(127)

器台のミニチュア器と思われる。高さ2.9cm、受部径2.3cm、底部径2.6cmを測る鼓形をした器台である。

調整は全面磨滅のため不明である。

(2). A トレンチ

1) 土壙 (128) 図版33

S K 6

瓦器 (128)

椀が1点出土している。底部中央が欠失しているが、内湾する体部は口縁端部付近で少し外反し内側に段を持つ。高台は底部外周に退化した断面三角形のものが貼り付けられる。125と同じく13世紀前半頃のものと思われる。

2) 蓋 (129~148) 図版6. 33

S D 5

黒色土器 (129)

椀が中層の砂層より出土している。口径14.8cm、器高6.3cmを測る。丸味のある底部から、口縁部が内湾気味にのび、端部内面下に沈線を1条巡らせる。高台は底部外周にしっかりしたもののが外ふんばりに取り付けられる。内面花弁状ヘラミガキ、外面は波状のヘラミガキを体部以上に密に施す。黒色化は内面と外面端部にみられる。全体的にかなりていねいな作り方をされており、12世紀頃のものであろう。

S D 9 (130~144)

土師器 (130~142)

椀 (130) は、丸味のある底部から内湾気味にのびる口縁部をもつ。口径12.4cm、器高5.6cmを測る。外面は粘土紙の接合部分を残す粗製な土器である。131は口径11cm、器高4.1cm以上を測り、杯になるものと思われる。調整はココナデが施されている。高杯は杯部 (132) と脚部 (133) の破片が出土している。132は人きく外方へ開く口縁部の内面にタテ方向の密なヘラミガキを施したものである。133はハの字状に開く脚柱部で、磨滅が著しい。甕は9点が図示できた。134~135は近江型の受口状口縁をもつもので、135の外面底部以下にハケ目を施す他はナデ調整されている。140~142は布留式と呼ばれる甕でやや古い段階のものであろう。他は頭部でくの字に外反する口縁をもつもので、136はそれがやや不明確なものであり、139は内湾気味に立ち上がるるものである。131を除いて4~6世紀頃のものであろう。

須恵器 (143~144)

143は杯蓋で、天井部と口縁部の境に明確な稜線をもつものである。144は口径9.1cm、器高4.1cm以上を測る深手の杯身である。

6世紀前半の土器と考えられる。

S D 10 (145~146)

弥生土器 (145)

壺の底部である。

土師器 (146)

小梨壺の体部以上の破片である。口径8.4cmを測る。

S D 12 (147~148)

縄文土器 (147~148)

いざれも破片で、147は口径25.4cmを測る薄手の甕と思われる。148は甕の小片と考えられるが詳細は不

明である。

3) 下層包含層 (149・150) 図版 6. 33

土師器 (149・150)

149は二重口縁壺と思われる。端部に3ヶ所以上の穿孔が見られる。150は長胴甕の口縁部の破片であろう。

(3). B II - 1 トレンチ

1) 土壇 (151) 図版 7. 34

S K89 (151)

須恵器 (151)

長頸壺の破片である。大きくラッパ状にII縁部が開き、端部を丸く收めている。中位に3条の沈線が巡っている。

2) 旧河道 2 (152~182) 図版 7 ~ 9. 34 ~ 35

土師器 (152~176)

壺は小型壺 (152~161)、中型壺 (164~166)、大型二重口縁壺 (167) と甕 (162・163) に分けられる。小型壺は口縁部が大きく開くもの (153~155・157・159・160) と短くのびるもの (152・156・158・161) に分かれるが、球形の体部の上3分の1に1孔を穿ち、外面はハケ目、内面はナデ調整を施している。大型壺はII縁部が大きく開く166と短かくのびるものに分かれる。總て体部は球形を呈し、外面にハケ目調整が施されている。大型壺は、二重口縁をもつもので、断面逆Yの字状を呈する1段目の口縁部から垂直に2段目が立ち上がる。境には稜が形成される。全面ヨコナデ調整である。甕は布留式のもの (168) が1点図示できた。球形を呈すると考えられる体部上半以上の破片で、くの字状に内窓しつつのびる口縁部の端を肥厚させ、内傾する凹面を形成している。体部外面は横方向のハケ目、内面は頸部が横、以下は斜め方向のヘラケズリが施されている。169~171は高杯の杯部の破片である。169は浅い皿状の杯部を呈し脚部は面取りを行っている。他は深い杯部を有し、口縁部が大きく外へ開いている。調整はナデによるものが多い。172・173は脚部で、172がラッパ状の裾部を呈するのに対し、173は大きく屈折して外へ開く。柱状部内面はともにヘラケズリ、172は外面を細かく面取りしている。174は碗である。丸味のある底部から、口縁部が内窓気味に立ち上がり、端部を丸く收めている。口径9.2cm、器高5.1cmを測り、ヨコナデで調整されている。175・176は小型手捏ね土器と考えられ、175は瓶形、176は壺形を呈するものである。どちらも手捏ねの製品で指圧痕が多く残すが、175の内面と外面上半分にはヨコナデが施されている。

須恵器 (177~182)

平らな天井部から、境に明確な稜を持った口縁部がまっすぐにのびる形態の杯蓋 (177) は、天井部外面の5分の4以上にヘラケズリが施されている。杯身は2点図示され、178は口径13.2cm、器高6.6cmを測る深い器形を呈している。179は浅い皿状の器形を呈し、口径13.2cm、器高2.8cmを測るものである。高杯は180が杯部のみ、181が脚部のみで、182がほぼ完存している。180・181のスカシ孔は三方と考えられるが、182には見られない。

3) 旧河道 1 (183~194) 図版 9. 36

縄文土器 (183)

内窓しつつ外上方へ開く体部から、大きく外反する口縁部を有する。内面と体部外面に巻貝調整が施さ

れており、浅鉢であろうと思われる。

#### 土師器（184～190）

小型壺は3点出土している。184は浅く内弯する体部から、大きく口縁部が外へ開く形態を呈するもので、体部は内面へラケズリ、外面にハケ目を残す。185・186はやや算盤下に近い体部から口縁部が外へ大きく開くもので、185は体部にナデ、186はハケ目調整を施している。187は中型の壺である。やや下ぶくれの球形に近い体部をもち、口縁が外へ開く。内面口縁部と外面にハケ目を施している。壺は3点出土しており、188は口径13.6cmを測る布留式壺である。189は長胴形の体部にくずれた受け口状口縁がつづくもので、体部外面はハケ目、内面はヘラケズリを施しているが器壁は厚めである。190は球形に近い体部に短く外反する口縁部がつづくもので、調整は189と近似する。

#### 須恵器（191～194）

杯蓋（191）は、やや丸味を帯びた天井部をもち、口縁部との境に明確な突線に近い稜を形成するものである。口径12cm、大井部の5分の4以上にヘラケズリが施されている。杯身は2点出土し、ともに立ち上がりを有するやや深めの器形である。口径はいずれも11cm位で、外底面の4分の3程にヘラケズリ調整が施されている。194は高杯の杯部で、杯身と同様の形態を呈する。脚部には三方に長方形のスカシ孔が認められる。

#### 4) 包含層（195～329） 図版9・10～36～40

##### 弥生土器（195～199）

壺（195・196）は、底部の破片で、内外にハケ目が施されている。197は近江型の受け口状口縁を呈するもので、頸部に刻目、頸部に3本1組の櫛指直線文を施す。198・199は壺の底部の破片である。

##### 土師器（200～232）

壺は、小型壺（200～207）と中型壺（208）に分けられる。小型壺は口縁がまっすぐ外方へのびるもの（200・201・203・204・207）と内弯するもの（202・205・206）に分かれる。200は底部端に焼成後の穿孔がある。201・206は底部が平らであり、204・205は平底気味である。208は口縁が大きく外反気味にのび、外面はハケ目調整されている。

壺は、脚台付小型壺（209）、受口状口縁壺（210・211）、布留式壺（212）、把手付壺（213）が出土している。209は丸い体部に短く外反する口縁部を有する。脚台部はハの字状にのび、端部を内側へ折り曲げている。調整は内外面ともハケ目を施している。東海系のものであろう。210は体部上半に斜め方向のハケ目調整を施している。212は球形の体部に端部が内側に肥厚し、内弯気味にのびる口縁部が続くもので、体部は外面ヨコハケ、内面へラケズリ調整を施している。213は球形の体部から短く外反する口縁部がのびるもので、端部を内へ肥厚させている。体部の中位に断面帝円形の牛角状把手が1対貼り付けられている。外面ハケ目、内面へラケズリ調整が施されている。高杯は杯部と脚部の破片が出土している。口縁部が内弯気味にのびるもの（214～217）と外反するもの（218～221）に分かれ、215は碗状を呈し、いびつである。また、217は内外面に密なヘラミガキが施され、220は内面と底部外面に密な、外面に粗なヘラミガキを施しており、217とともに精製品と考えられる。脚部では、裾がゆるやかに開くもの（223～225）、角度をもって急に開くもの（222・226）に分かれる。主にナデ調整が中心であるが、225は外面にタテのヘラケズリを施して曲取りしている。226にはスカシ孔が1孔穿たれている。器台（227）は、大きく開く口縁部の外側端部を少し肥厚させ、そこに擬四線を8条巡らせるものである。内面は横方向の粗いヘラミガキを施す。北陸系の土器であろう。碗（228）は、浅く内弯する口縁部と断面三角形の太い高台を持つものである。

皿は4点出土している(229~232)。いずれも内弯する口縁を有するものであるが、230がそのまま終わるのに対して、他の3点は端部近くで少し外反気味にのびる。

#### 須恵器(233~324)

蓋は高杯の蓋と考えられるもの(233~234)と杯の蓋と考えられるもの(235~247)がある。高杯の蓋はともに中央の凹んだつまみの部分のみの破片である。杯の蓋は、天井部と口縁部の境に明確な稜線をもつ古いタイプ(235~242)と、稜線が不明確なタイプ(243~246)、天井部につまみの付くタイプ(247)に分けられる。244は口径6.8cm、器高2.2cmを測る小型品である。杯身は、立ち上がりを持つもの(248~276)と持たないもので、高台の無いもの(277~284)と高台を有するもの(285~294)に分けられる。前者では、5~6世紀頃と考えられるもの(248~271)と7世紀頃のもの(272~276)に分かれるであろう。後者では7~8世紀のものが多い。287は底部外面の中央寄りに「三宅□」と読める墨書きが見られる。高杯は無蓋のもの(295~300)、有蓋のもの(301~303)、胸部のみのもの(304~310)に分けられる。無蓋のものは、内弯する口縁部が上半分でやや外反気味にのびる形態を呈し、口縁中位に1~2本の突線が巡るものである。突線の下には波状文が巡らされている。有蓋のものは、立ち上がりを持つ杯身と同形態を呈する。脚部はラッパ状にのび、端部で外方に肥厚させるものである。306~309は外面をカキ目調整し、304・306・308・310は四方スカシを、309は三方スカシを有し、他はスカシ孔を持たない。皿(311)は、平らな底部から浅く外方に開く口縁部を呈する。鉢(312)は底部が平らで、内弯する口縁部を呈し、外面底部にヘラケズリ調整が施される。口径19cmを測る。壺は、広口壺の小型器種(313~314)、大型器種(315)、短頸壺の小型器種(316~317)、大型器種(318)に分けられる。小型広口壺は大きく開く口縁部の上位に相対的突線を1条巡らせたもので、313はその上下に、314はその下に波状文を施す。大型広口壺はラッパ状に開く口縁部が端部を外側に肥厚させるもので、その下方を強いナゲによって凹ませている。波状文はその下に上下2段に施されている。小型短頸壺はともに肩の張る器形で、317は底部にヘラケズリが施される。口縁部は短く直立する。大型短頸壺は、丸味のある体部から外反気味に外へのびる。体部は内面に同心円印き、外面は格子目印きが残されている。平瓶(319)はやや肩の張る扁球形を呈する体部の一方に片寄ったラッパ状の口縁部を接合させている。口縁上位には2~3条の沈線が施されている。頸部の近くには2個1対の円形浮文を貼り付け、底面はヘラケズリ調整が行われる。甌は口縁部のみの破片(322・323)と体部の破片(324)がある。前者は大きく開く口縁が、端部で上下につまみ出され、その下に1条の突線が巡らされるものである。波状文は、322では突線の上下に、323では下方に施される。後者は体部が球形を呈すると考えられ、最大径の辺りに把手が貼り付けられた痕跡が残る。内面同心円印き、外面は細かい格子目印きを施し、陶質土器との関連性も考えられる。

#### 縁輪(325~327)

いずれも甌の底部片である。325・327は高台の内側に段を持つタイプで、近江産と考えられる。325には底部内面に1条の沈線が巡る。

#### 灰釉(328~329)

いずれも甌である。328はやや高めの高台を持ち、329は低くどっしりとした高台を有する。

(4). B III - 1 トレンチ

1) 旧河道 2 (330~340) 図版10. 40

土師器 (330~338)

全て皿である。平らな底部から口縁が内湾しつつのび、端部付近に至ってやや外反気味になるもので、端部は丸く収めている。口径11.8~12.1cm、器高2.3~2.9cmを測るもので、ほとんどが接近して発見されている。

須恵器 (339~340)

339は杯蓋である。天井部と口縁部との境がやや不明確な形態を呈する。340は広口壺で、平らな底部からやや肩の張った球形を呈する。口縁はラッパ状にのびるが先端は欠失している。

2) 旧河道 1 (341~388) 図版10~12. 40~43

縄文土器 (341~343)

深鉢 (341) は、口縁部が内湾気味にのび波状口縁を呈する。端部に刻み目が施されている。外面端部下に半載竹管文の連続文様を横方向に施している。壺はともに口縁が直立するもので、端部外面に断面三角形の刻み目突帯を巡らせている。これらは、いずれも小片のため口径が復元できなかった。

土師器 (344~372)

壺は小型壺 (344~352) と中型壺 (353~355) に分けられる。小型壺は口径6.3~10.2cm、器高8.1~10.7cmを測るものである。口縁部が大きく開くもの (344~346・348・350~352) と小さく開くもの (347~349) に分かれる。体部はほぼ球形を呈するものばかりである。調整はナデを中心で、ハケ目、ヘラケズリなどが加わる。347は底部外面に凹みが残る。成形時の粘土板充填の跡であろう。中型壺は353が口縁部が大きく開くタイプ、他はやや短めに広がるタイプで、体部はともに球形を呈する。調整は、前者がナデ、後者は内外にハケ目を施している。壺 (356) は、球形の体部に舌状の把手が付くもので口縁部は内湾する。調整は内外ともにハケ目が施されている。高杯は杯部のみ (358~363) と脚部のみ (364~367) の破片に分けられる。358は水平な底部から屈折して大きく外へ開くもので、屈折した所に竹管円形浮文が貼り付けられている。外面に密なヘラミガキが施された精製品である。359~363はともに平らな底部から大きく外反する口縁部を有し、358と同様の形態を呈している。359・360の内面にハケ目の跡が残る以外は全てナデ調整である。359は杯部上端に焼成後の穿孔が見られる。脚部はラッパ状にのびるもの (364~367) と途中で大きく屈折するもの (365~366) に分かれる。ともにナデを中心とした調整が施されている。器台は小型品のもの2点、中型のもの1点が出上している。368~369は小型器台で古式十師器の三種セットとして扱われるものである。内外にヘラミガキが施され、ていねいな作りである。369は受け部が貫通している。370は鼓形を呈するもので、外側はタテ方向のヘラミガキ、内面にはハケ目調整が施されている。碗 (371) は、口径11.5cmで丸底を呈する。厚めの器壁をもち、内外面に粗いハケ目を施している。杯 (372) は平底に内湾する口縁部を有する。口径13cm、器高3.9cmを測る。

須恵器 (373~387)

杯蓋は棱線の明確なもの (373) と不明確なもの (374~375) に分けられる。374は口径10.7cmのもので、完形品である。杯身は受け部と立ち上がりをもつもの (376)、もたないもので高台が貼り付けられないもの (377~382)、高台が貼り付けられるもの (383~384) に分かれる。376は口径11.4cm、器高4cmで古相を呈している。382は少しいびつであるが、口径14.1cm、器高6.7cmを測るもので、かなり深いタイプであ

る。383は口縁部外面に「三窓」と読める墨書き認められる。鉢（385）は平らな底部から内窓しつつ大きく開く体部をもつ。口縁部は少し外反気味にのびる。底部外面にヘラケズリを施している。壺は中型のもの（386）と大型のもの（387）に分かれる。386はやや肩の張る球形の体底部を有する。口縁部は外反し、中位に1条の突線を巡らせる。調整は外面上半にカキ目、底部にヘラケズリを施している。387は倒卵形の体部をもち、口縁部はくの字状に外反する。口縁中位を肥厚させ、端部を外へつまみ出すため水平な面が生じている。体部外面上位にカキ目、下位には横格子状の叩きが施される。内面には同心円叩きが残る。

#### 土器片鱗（388）

直径7cmのほぼ円形を呈し、相対する直線上を少し打ち欠いている。縄文土器を加工したものと思われる。

#### 3) 旧河道3（389） 図版43

#### 須恵器（389）

杯身が1点出土している。受け部や立ち上がりをもつもので、古いタイプの杯である。

#### 4) 包含層（390～393） 図版43

#### 土師器（390～392）

小型壺が2点、皿が1点出土している。390・391はほぼ球形の体部に大きく開く口縁部をもつもので、内外面にハケ目調整を施している。392は口径16.2cmを測る大型の皿で、内窓気味にのびる口縁部が、端部近くで少し外反する。

#### 須恵器（393）

高杯の脚部片である。ハの字状にのびる柱状部は、端部で外に肥厚させ、下方に屈折する。外面はカキ目調整され、四方にスカシ孔をもつ。

（三宅 弘）

## 2. 木器

各トレンチとも、木器は数多く出土しており、その用途は日常生活用具を中心に、斎串・人形などの祭祀具などが見られた<sup>11</sup>。今回は、これら統ての木器の整理が完了していないので主要なもののみについて考察を行った。

出土木器の年代については、弥生時代～室町時代に及ぶと思われる。しかし、当遺跡が北川の氾濫原に位置し、出土層が主に包含層であるために、その年代の断定は難しく、様式や形状により年代が類推できるものの年代を示した。

本報告では、これら出土木器の特徴とその性格を明らかにすることを主とし、一つの試みとして有形民俗文化財の分類を採用し、民俗の立場からこれら木器の機能別な分類を試みた。

なお、分類は文化庁内民俗文化財研究会編『民俗文化財の手引き』を基本とした。

#### 衣（1～7） 図版13. 44

#### （服飾具）

1 扇子の骨。端部に要の孔と思われる小孔が穿たれている。厚さが他の類例と比べ厚いため、他の用途に使われた可能性も高いが、製作途中品とも考えられ、今回一応扇子の骨として分類した。全長22.1cm、最大幅2.6cm、厚さ0.4～0.6cm、スギ製。BⅢトレンチ、包含層出土。

2～4 梯。全て板片の一側縁から細い歯を挽き出し、表面を平滑に研ぎあけた横櫛。2、3は半円形状

で、2は飾りとしての透かしを2ヶ所有する。4は長方形状であるが、かなり土圧などによる歪みをきたしている。2、現存幅5.6cm、高さ5.3cm、厚さ1.0cm、イスノキ製。B II - トレンチ、包含層出土。3、現存幅3.4cm、高さ4.8cm、厚さ0.9cm、ツゲ製か。B IV - トレンチ、包含層出土。4、現存幅8.2cm、高さ3.5cm、厚さ0.6cm、ツゲ製か。B II - 1 トレンチ、包含層出土。

(はきもの)

5～7 下駄。全て台と齒を一本からつくる連歯下駄である。5は前歯を前歯のやや内側にあけ、後歯は後歯の前にあける。齒は台の両側よりやや内寄りに歯をつける。また裏面の一部に焼け焦げた痕跡が認められる。6、7はいずれも欠損し、後歯の前に後歯孔が一つだけ残存する。5、全長22.4cm、最大幅11.9cm、高さ3.1cm、歯の間隔6.0cm、ヒノキ製。B IV - トレンチ、包含層出土。6、現存長21.4cm、高さ3.1cm、歯の間隔4.8cm、マツ(二葉松)製。A トレンチ、包含層出土。7、現存長26.5cm、高さ3.2cm、歯の間隔4.9cm、スギ製。B III - 1 トレンチ、包含層出土。

食(8～17) 図版14. 44・45

(調理・調整用具)

8 円形皿。挽物。平面が円形に近い平底の皿で、内外面共に多数の刃痕が認められるため、一応調理用具として分類した。漆の痕跡はない。径23.7cm、高さ1.6cm、厚さ0.5cm、スギ製。B II - トレンチ、包含層出土。

16、17 約子形木器。先端を半円形に整形した身の長い攪拌用の用具と思われるが、適当な用語が見当たらず、『木器集成図録』に従い、約子形木器と呼んだ。16、全長56.8cm、最大幅3.1cm、スギ製。17、現存長48.4cm、最大幅3.0cm、スギ製。16、17、B II - トレンチ、包含層出土。

(飲食器)

9～14 凹形曲物。曲物の用途は極めて広く、衣食住から生業・運搬、ひいては信仰や通過儀礼などに使用される。今回、その使用形態が想定できうるものは9と12で、表面に刃痕認められ、食事用として使用されたと思われる。その他は總て断片であり、その使用目的は明らかにできないが、ここでは一括して飲食器として分類した。9は側板と桟皮の一部が残存する。刃痕を有するため底板と思われ、木釘(針葉樹製)を打ち込んだ痕跡が側面に5ヶ所確認でき木皿として使用された可能性が高い。10、11、13、14は總て断片であり、釘の痕跡も認められない。11は他に比べ厚さ(1.1cm)があるため桶底、もしくは樽底の可能性もある。12は刃痕が認められるため、曲物の底板の可能性が高い。側面には木釘を打ち込んだ痕跡が4ヶ所確認できる。9、直径16.9cm、高さ2.3cm、底板の厚さ0.6cm、底板スギ製。側板ヒノキ製。B IV - トレンチ、包含層出土。10、スギ製。B IV - トレンチ、包含層出土。11、スギ製。B II - 1 トレンチ、包含層出土。12、直径16.7cm、厚さ0.7cm、ヒノキ製。B III - 1 トレンチ、包含層出土。13、スギ製。14、ヒノキ製。B III - トレンチ、包含層出土。

15 蓋板。上器などの容器の蓋として用いたと思われ、円板の中心に孔があけられている。直径13.3cm、中心孔径1.0cm、厚さ0.7cm、ヒノキ製。B II - 1 トレンチ、包含層出土。

住(18) 図版14. 45

(住居)

18 梯子。1段分のみ残存。高床建築に使用された。現存長39.5cm、幅13.3cm、厚さ4.0cm、踏み面切り込

み6.0cm、ユズリハ製か。B IVトレンチ、旧河道3出土。

農耕(19~28) 図版15・16. 45・46

(耕作用具)

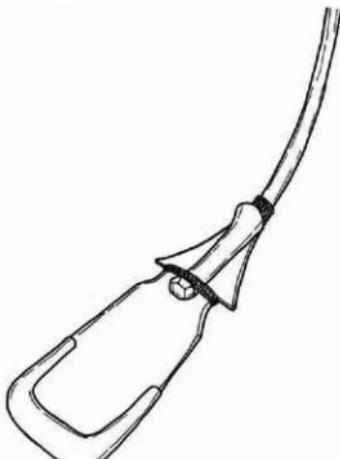
19、20 ナスピ形着柄鋤の身。鋤柄と組み合わせにより使用され、滋賀県針江中遺跡においては、ナスピ形の鋤の身と柄が一括して出土した。近年、静岡市元宮川遺跡から、着柄鍬と思われる木器が出土したが、その形状のみから考察をするのであれば、鍬よりはむしろヒトリズキ(人力犁)として使用されたと考える方が適切と思われ、これらの遺物は、鋤あるいは犁として使われたと考えたい。19は身を台形状に整形しており明確な縛り痕が認められないため木鋤の可能性も残す。20は身の上部に柄を固定した時の縛り痕が認められる。19、現在長35.5cm、身幅11.7cm、カシ製。B IIトレンチ、包含層出土。20、カシ製。B IIIトレンチ、旧河道1出土。

21 ナスピ形着柄股鍬の身。2股の鍬の形状をなすと思われ、身の上部に縛り痕が認められる。カシ製。B IIIトレンチ、包含層出土。

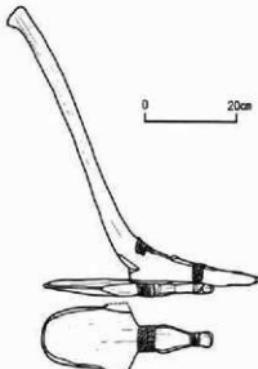
22 踏み鍬の身。身は水平方向から約10°そり上がり、身の3分の1の所に鉄歯を装着した跡が残る。江州鋤の原型と考えられる。現存長42.4cm、カシ製。B II-1トレンチ、旧河道2出土。

23 組み合わせ鋤の柄。先端は折損する。上方部に反りをもたし、柄の下方部は使用による摩滅痕跡が残る。現存長75.6cm、把手長11.1cm、把手幅10.9cm、最大径2.9cm、カシ製。B IIIトレンチ、包含層出土。

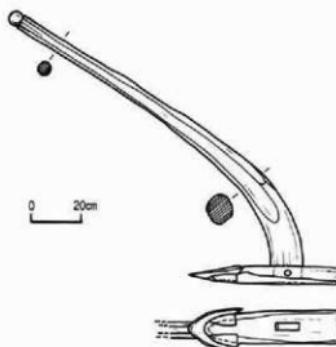
28 田下駄。深田などの農作業時に、身体が泥中に沈下するのを防いだり、苗代や田植前の本田の代踏みに



第5図 鈴江中遺跡出土  
ナスピ形着柄鋤の着柄状態



第6図 静岡県元宮川遺跡



第7図 ヒトリズキ(力耕)

使用されたと思われ、枠型を固定する為の孔が前後に2個づつあけられている。全長50.0cm、ヒノキ製か。B IV トレンチ、包含層出土。

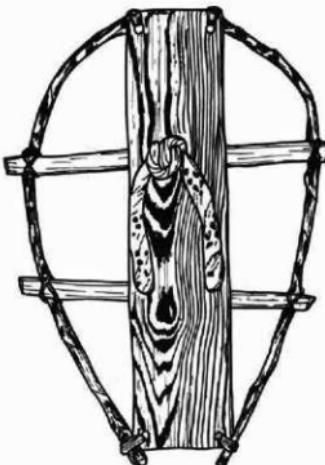
(調整用具)

24 唐臼の杵。角材を軸とし、頭部は丸く加工する。これを横の軸木に固定し、一端を足で踏みテコを利用し脱穀を行ったと思われる。上部は欠損。現存長30.3cm、頭部長6.9cm、頭部最大径6.2cm、ヒノキ製。B III トレンチ、包含層出土。

25 垂杵。丸太材を削り整形し、一端を球面状につくる。他端は折損。端部より4分の1の所を2次的に削っており、端部の摩滅状況を見ると捕粉木への転用も考えられる。現存長45.4cm、最大径8.2cm、ユズリハ製。B IV トレンチ、旧河道1出土。

26 横槌の身。心持丸太材。柄の部分は欠損。身の断面はほぼ円形で、主に藁打ちなどに使用されたと思われる。現存長15.1cm、最大径15.2cm、カシ製。B II - 1 トレンチ、包含層出土。

27 木鎌。一般にツチノコと呼ばれ、蓆編みなどに用いられる。加工は粗雑で、中央に向って両方より円錐状に削り込み、両端も円錐状に加工する。現存長15.3cm、最大径6.9cm、最小径4.3cm、ヤブツバキ製か。B III トレンチ、包含層出土。



第8図 民具の田下駄 (千葉県)

漁撈 (29~31) 図版17. 46・47

(船)

29 捩。捩の水かき状をなし、全面は薄く削られており、端部はさらに2次的に削り整形されているが、断片であるため、その全容は明らかでない。カシ製。B II - 1 トレンチ、包含層出土。

30、31 アカトリ。湖東地区においてはツキオケとも呼ばれ、船に入った水を汲み出すのに用いられたと思われる。その他の用具の可能性も高いが、今回は一応漁撈具として扱った。13、全長30.5cm、柄長10.1cm、スギ製。B III トレンチ、旧河道1出土。14、現存長30.7cm、スギ製か。旧河道3出土。

信仰 (32~34) 図版18. 47

(祈願品類)

32 斎串。両端側の対称位置にV字形の切り欠きを5対入れる。この斎串は、黒崎直氏の分類によると斎串Eに比定され、8世紀から9世紀を中心に使用されたと思われる。現存長24.5cm、最大幅3.4cm、最小幅1.8cm、スギ製。B II トレンチ、包含層出土。

33 人形。短冊状の板を切りぬいて扁平な人形を形成し、左右から切り込みを入れ手を表現してある。下端にはおそらく足も表現されていたと思われるが欠損しており、不明である。使用方法は、祓いの行事の一つとして、通常水に流されるものであり、この人形も北川の流れに流されたものと思われる。時代は、奈良時代が想定される。現存長14.0cm、首頸部幅2.9cm、最大身幅3.9cm、スギ製。B IV トレンチ、旧河道

2出土。

34 舟形。角材に船槽を割りぬいてつくる。舟首には切り込み（小孔か？）がほどこされ、船底と舳には貫通する小孔が穿たれている。両舷の後部には木釘が認められ、右舷前部には釘を打ったと思われる貫通する小孔が、左舷前部には欠損した木釘が確認でき、舷側板を打ちつけた準構造船の可能性が高い。全長17.7cm、最大幅3.3cm、高さ1.9cm、スギ製。B IIIトレンチ、包含層出土。

35~37 こけら経、薄く剥いだ木片に法華經などの經典を書写することにより功德や呪術的効果を望むもので、鎌倉時代～室町時代に主に行われ、鎌倉時代～室町時代前半には両面に書写し、室町時代後半以降、原則的に裏面に書写しない形に変化する。こけら経は原則として20本（時代が新らしくなると40本）を一把とし、根元をこよりでたばねた。なお、書写された經典については現在調査中である。35、両面書写、現存長15.8cm、幅1.0cm、厚さ0.6mm、ヒノキ製。36、片面書写、現存長15.0cm、幅1.2cm、厚さ0.7mm、スギ製。37、片面書写、現存長16.0cm、幅1.4cm、厚さ0.9mm、スギ製。3点共、B IVトレンチ、包含層出土。

#### 人の一生 一通過儀礼一 (38~41) 図版18・19. 47

(葬送用具)

38~40 卒塔婆。時代的には鎌倉時代～室町時代の遺物であり、3点ともその形状は大きくなる。38は上部に五輪を刻み “釋迦多寶佛”（キャ・カ・ラ・バ・ア）の五輪配布の種子と“南无阿弥陀佛”的五文字を墨書きで記し、もう片面にも、梵字4文字（解説不能）と“美”（ア）と同じく“南无阿弥陀佛”的墨書きがあり、下部から4分の1の所の両端にV字形の切り欠きが入る。39は上部をやや尖らせ、上部両端にV字形の切り欠きが2回入る。墨書きの痕跡が確認できるが、解説不能。40は35、36に比べやや幅広で、上部の両端にV字形の切り欠きが2回、下部から2分の1の所に同じくV字形の切り欠きが1回ほどこされている。片面には経文の墨書きが2列にわたり認められるが不明瞭である。38、全長51.8cm、最大幅6.0cm、スギ製。39、全長59.2cm、最大幅5.2cm、スギ製。40、全長40.4cm、最大幅8.3cm、スギ製。3点共、B IVトレンチ、包含層出土。

41 小型卒塔婆。全体に五輪形を刻み、空輪から地輪まで総て表現されている。表面には墨書きが認められるが、現在“門”的文字しか解説できない。人名が書かれていた可能性も高い。時代は五輪の形状などから室町時代後半が想定される。この卒塔婆は他の3点と異なり極めて小型であり、その使用形態も違っていたと考えられる。全長18.4cm、最大幅2.7cm、厚さ0.6cm、ヒノキ製。B IVトレンチ、包含層出土。

#### 不明品 (42~45) 図版19. 48

以下の木器は、その形状から用途を類推することができず、分類できないが、特徴のあるもののみ、その形状を記した。

42 丸木を削り、栓状にかたどる。木栓として使用された可能性も多い。現存長12.1cm、最大径4.9cm、スギ製。B III-1トレンチ、旧河道3出土。

43 厚板を整形し、握り方に木を割りぬき、他方に穴を貫通させる。農具などの握り手とも考えられる。全長33.2cm、幅11.3cm、スギ製。B IIトレンチ、包含層出土。

44 楠穴を有し、一部に焼け焦げた痕跡が認められる。現存長21.0cm、最大幅12.7cm、スギ製。B III-1トレンチ、旧河道3出土。

45 椅の形状に類似するが、両端共に欠損しており、その原型は不明である。現存長102.5cm、最大幅8.6

## 3. 石器 図版20. 49~51

今回の調査では、石鎌・石錐・石匙・石斧・石槍・有孔円板・紡錘車などが出土している。これらのうちには、前年度に出土したものも含まれているが、今回括して取り扱うこととした。

## (1) 石鎌

現在整理中であり、正確な数は不明であるが450点前後出土している。そのうち、磨製が3点、他は打製である。形式別に6種類に分類できる。以下、各形式毎に代表的なものを掲げた。

## 1) 凸基無基式 (1. 16)

長さ2.1~2.3cm以上、幅1.3~1.6cm、重さ0.96~1.02gを測る。1は磨製であり、鎌身と基部の両先端を欠損している。1は頁岩16はサスカイト。<sup>(4)</sup>

## 2) 凸基有基式 (3. 22~24)

長さ2.25~2.75cm、幅1.25~1.65cm、重さ0.58~1.4gのものと、長さ5.7~6.3cm、幅1.4~2.05cm、重さ3.46~4.02gの2者に大別される。3は磨製であり、研磨痕はやや不明瞭である。鎌身は柳葉形を呈している。22は基辺が明瞭に見られるが、23や24は不明瞭となる。特に23は凸基無基式と混同するくらいに逆刺の突りがあいまいである。3は頁岩22はホルンヘルス23、24はサスカイト。

## 3) 平基無基式 (2. 12~15)

2は磨製であり、長さ3.7cm、幅2cm、重さ2.52gを測る。均等のとれた二等辺三角形を呈し、基辺を三分する位置に小さな突り込みが見られ、茎を意識している。12と14は2同様の二等辺三角形を呈し、長さ1.8~2.75cm、幅1.55~1.65cm、重さ0.77~1.35gを測る。12は側辺の調整痕が鋸歯状を呈する。13と15は五角形を呈する。長さ1.85~5.2cm、幅1.4~2.3cm、重さ0.79~6.04gを測る。14は大型の鎌である。2は頁岩12はチャート13、14、15はサスカイト。

## 4) 凹基無基式 (4~11. 25~26)

大きく4つに分けられる。a、五角形を呈するもの(6・25・26)とb、三角形のもの(5・9~11)c、側辺が内弯するもの(7)d、突りが深く鎌形状のもの(4・8)がある。aは長さ2~3.8cm、幅1.5~2.5cm、重さ0.54~3.43gを測る。25は大型で両側辺の突りが浅い。bは長さ2~3.75cm、幅1.4~2cm、重さ0.43~2.17gを測る。5は側辺が鋸歯状に調整される。10は側辺がやや外反気味にのび、基辺の両端が鈍く尖る。9は先端が尖り、基辺中央に小さな突りを入れている。cは長さ2.6cm、幅1.35cm、重さ1.13gを測る。側辺が内弯し基部の突り込みは広く浅い。dは長さ1.65~2.6cm、幅1.8~2.5cm、重さ0.5~1.53gを測る。4~7はサスカイト、8は流紋岩9はチャート10、11、25、26はサスカイト。

## 5) 尖基式 (17)

長さ3.75cm、幅1.6cm、重さ2.43gを測る。柳葉形を呈しているが、先端に向って急激に細くなっている。厚めの鎌である。17はサスカイト。

## 6) 円基式 (18~21)

長さ2.25~5.3cm、幅1.15~2.3cm、重さ0.65~5.37gを測る。18は大剣離面を大きく残し、縁辺を調整している。18は均整のとれた柳葉形を呈しているが、19~21になるにつれて下ぶくれの基辺両端の丸い隅丸三角形に近い形に変化する。21は大型である。19を除いて大剣離面を残している。18~21はサスカイト。

## (2) 石槍

1点が確認されている。27は長さ5.35cm、幅1.5cm、重さ3.97gを測る。基部の返しがあまり発達しておらず、やや小型ではあるが立川ポイントに類似する。

## (3) 石錐

1点出土している。28は長さ4.7cm、幅1.1cm、重さ2.75gを測る。細身の椎状を呈するが、つまみを上3分の2の位置にもつ。先端を始めとして全体的に磨滅している。

## (4) 石匙

2点が出土している。29は長さ3.7cm、刃部幅5.3cm、重さ7.5gを測る。つまみ状の小突起は次第に浅く四角形を呈する。刃部は片面に作られているが、あまり明確でなく粗製である。30は長さ4.0cm、刃部幅6.3cm、重さ10.2gを測る。つまみ状小突起は両端を丸く抉られて明確な形を呈している。刃部は片面に明確に作られる。29、30ともに平面は較った三角形を呈し断面は反らざまっすぐである。

## (5) 有孔円板

30数点出土している。このうち、図示したのは24点である。穿孔の数によって、Aタイプ（2ヶ所に穿孔）とBタイプ（1ヶ所に穿孔）に分けられる。

Aタイプ1～16は直径1.2～3cm、厚さ0.21～0.45cm、重さ1.02～5.45gを測る円形の薄い板。孔の間が狭いもの（1・7・12～14・16）と広いもの（2～6・8～11・15）に分かれ、おおむね円形を呈しているが5は1.8cm×2.7cmの三角形、10は1.2cm×2.5cmの長方形を呈する。10は片側の孔が2分の1程あけられたままで未通となっている。

Bタイプ（17～22）は直径1.1～2cm、厚さ0.15～0.3cm、重さ0.85～1.78gを測る円形の板状を呈する。孔はいずれもほぼ中央に穿たれている。22は円周部分がかなり角ばっており、未製品に近い状態であると思われる。

23と24は穿孔の行われていないもので、直径1.65～2cm、厚さ0.25～0.3cm、重さ1.42～2.14gを測り、凹形を呈している。23は22と同じく円周部分に調整が施されていないものであろう。

## (6) その他

管玉（1）、勾玉（2・3）、块状耳飾（4・5）、紡錘車（6）、石斧（7）が出土している。

管玉は長さ3.1cm、直径0.4cm、孔径0.1～0.2mm、重さ0.77gを測る。穿孔は片側より行われている。色調は灰褐色を呈し、材質は滑石である。

勾玉は2点出土している。2は長さ1.7cm、幅0.5cm、重さ0.99gを測り、完形である。頭部の孔は片側から穿たれている。3は下半部が欠損し、現在長2.3cm、幅1.2cm、重さ4.11gを測る。2と異なり両側面が平らでやや偏平な感じを受ける。頭部の孔は片側から穿たれる。

块状耳飾は完形のもの（4）と半分欠損したもの（5）が出土した。4は幅4.9cm、孔径1.3cm、厚さ0.7cm、重さ19.68gを測る。断面が偏平な卵形を呈し、比較的新しいものと思われる。5は切り込み部分と中心を通る線で2分割された形で片方が残っている。縦径3.8cm、孔径1.1cm、厚さ0.5cm、重さ5.23gを測る。4と同じく断面が偏平な卵形を呈しているため、新しいものであろう。

紡錘車（6）は直徑3.5cm、厚さ0.8cm、孔径0.5cm、重さ13.77gを測る。偏平なくずれた台形を呈する。

磨製石斧（7）は、長さ7.2cm、刃部幅4.1cm、厚さ1cm、片刃を意識しているが完全ではなく両面がふくらんだ弱凸強凸の片刃である。刃縁は直であるが両端に向けてやや外反気味に反る。鎬は不明確である。

（一宅 弘）

#### 4. 土錘 図版21. 48

土錘は各トレンチ共、包含層を中心に出土し、旧河道1、2、3からも少数出土したがこれら土錘の使用年代を断定するには至らない。

当遺跡ではとりあえず形態によって土錘をA～C型に分類し整理を行っているが、その出土数があまりにも多く今回はその各型式の代表的なもののみについて実測図を載せた。

これら土錘の使用形態は、主に小糸網を中心に、中型のものは投網、大型のものは曳き網などに使用されたと思われ。古代、中世の琵琶湖の漁撈を探る一つの手がかりとなるであろう。

A型：円筒形で、端部を切断し整形する。

B型：調査の円筒形で、端部を切断し整形するものと、未調整のものに大別できる。

B'型：B型に比べ小型のものを、B'とした。

C型：丸型で大型のものは少ない。

(秋政久裕)

#### 5. 古銭 図版21. 51

40点余りが河川その他から出土している。和同開珎15点を始めとして、泉朝十二銭のうち10種類が出土した。他に宋銭が若干混じる。完形品が多いが、25は欠損している。大部分が包含層からの出土であるが、22は旧河道3、6は旧河道2から発見され、それぞれの遺構時期を想定する一助となっている。

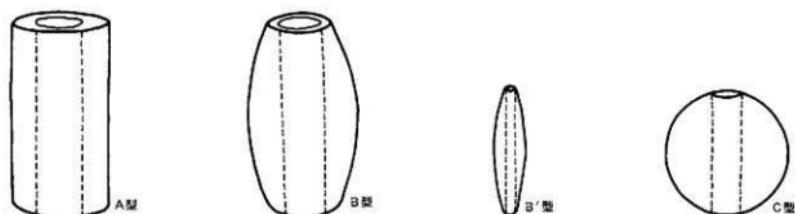
#### 6. その他 図版51

土製紡錘車と縫形品が出土している。

土製紡錘車（8）は、直徑3.8cm、厚さ0.5cm、重さ8.45gを測る。土器片を利用しているため、正面には刷毛目が観察できる。孔は直徑0.25cmのものが中央に両側から穿たれている。

縫形品（9）は、長さ1.5cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.63gを測る。須恵器と考えられる土器片を利用し、凹基無茎縫形に形成している。側刃などの細かな調整は行われていない。

(三宅 弘)



第9図 土錘の各形態

## 7 小 結

今回の調査では、土器を始めとして木器・石器・土錘・古錢など、大量の遺物が検出されている。また、前年度の概報で報告し得なかった遺物についても、今回掲載した。遺物は、出土量のはほとんどを占める土器を中心として記述した。

土器は縄文時代～鎌倉時代までを含んでいるが古墳時代、特に5・6世紀を中心とした時期のものが目立っている。小型壺が多量に出土しているが、壺・高杯・瓶などもかなり多く見られる。これら煮沸・供膳形態の土器は、旧河道より出土し、あまり著しい磨滅を受けていないことから、旧河道の周辺それも出土地点からあまり離れていない場所から投棄されたものであろう。今回出土の土器では、227は北陸系土器、209は東海系土器と考えられる。また、175が製塩土器の可能性を持っているなど、各地の土器が出土し、当時の交易の一端を物語っている。

木器は用途別に分類した。分類の基準として文化庁内民俗文化財研究会編『民俗文化財の手引き』を用いたのは、使用された時期に食い違いが見られるが、機能面での上での名称を重視したからである。櫛2は透しの認められるもので、管見の限りでは県内の出土例を知らない。あるいは、時代のかなり新しい遺物なのであろうか。これらはいずれも比較的最近まで使用されていたものと形状の近似するものが多い。特に農具関係の木器は変化の速度が鈍いと思われる。それと同じことは土錘についても言えることで、当初から現在までほとんど変化していない。

石器は縄文～古墳時代のものまで出土し、石鏃は縄文・弥生時代のものを含んでいる。崁状耳飾りは完形品の出土は珍しく、県内でも数点出土しているだけである。

古錢は皇朝十二錢が10種類出土した。特に旧河道2の氾濫の結果と思われる褐色砂層からの出土が多く、旧河道2の氾濫の時期を想定させる。

(三七 弘)

### 注

- (1) 出土木器の説明をするにあたり、奈良国立文化財研究所 史料第27冊『木器集成図録 近畿古代篇』を参考とした。
- (2) 樹種鑑定は、元興寺文化財研究所に依頼した。
- (3) 黒崎直「斎中考」(『古代研究』10、元興寺仏教民俗資料研究所・考古学研究所 1976年) P23～37
- (4) 石質の鑑定は、すべて滋賀文教短期大学講師守野光一氏の肉眼鑑定による。

### 挿図出典

- 第5図 「第5章 鈴江中遺跡の調査」(『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』3、滋賀県教育委員会 (財) 滋賀県文化財保護協会 1983年)
- 第6図 「神明原・元宮川遺跡」((財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1986年)
- 第7図 占屋信平、湯川洋司「民具観察書」(『弥栄城の民俗』名勝弥栄城総合学術調査団 1979年)  
木下忠「第3章 羣」(『日本農耕技術の起源と伝統』雄山閣 1985年) より転載。
- 第8図 「木器集成図録 近畿古代篇」(奈良国立文化財研究所 1985年)

## V. まとめ

今回の調査では、旧河道・土壌・橋・溝・ピット等の遺構が検出され、土器・木器・石器・古鏡等の遺物が出土している。遺物は旧河道と包含層からの出土がほとんどを占めるため、他の遺構の年代は明確にしがたい。遺構面は上層で鎌倉時代、下層で古墳時代の土器が出土しているため、その時期に比定できる。従って、旧河道を除く他の遺構は各遺構面の時期と考えられる。旧河道は上層に1条、下層に3条検出された。上層の旧河道2は古墳～鎌倉時代の土器を多量に包含している。上流側は幅も狭く浅い流れであるが、中・下流には幅も広がった深い流れと変化している。遺物も当然下流に堆積しているが、完形品も多く摩滅も多いものが多い。下層の旧河道1は縄文～古墳時代の土器が多量に出土している。上流側は川幅も北へ拡がっているため現トレンチでは明らかでなく、土器の出土量が多い。下流側は逆に川幅が若干狭くなり、土器もやや少ない。旧河道3は旧河道1の支流で古墳時代の土器が出土している。旧河道4は下流で2つに分かれて流れしており、川底直上の褐色砂礫層から縄文時代の土器が若干出土している。これらの旧河道はその形状が蛇行したり交錯した形で検出されており、両岸にも埋土と同じ褐色砂が堆積しているなど、氾濫が激しくかなり大量の土砂を運んでいる。現在の北川は天井川化し上流の金勝山地の危険な花崗岩帯を削り込んでいる。当遺跡に堆積している褐色砂も花崗岩の細かく砕かれたものと思われる。旧河道は北川の背の姿を顕わしているのであろう。また、縄文～鎌倉時代の遺物が絶えることなく包含されていることは、少なくともその期間は河川として機能していたと考えて良い。鎌倉時代以降は、現在に至るまでに約2.5mの土砂の堆積を見たことなどから、旧河道が機能していた頃に比べてより一層著しい運土が行われたのであろう。

旧河道や包含層から出土した遺物は、多種多様にわたるが、北陸系の土器や東海系の土器など近江の周囲に位置する地域からもたらされたと考えられる土器が出土している。これらは、石器の材料となるサヌカイトや陶器とされる須恵器などと共に、各時代の交流を物語っている。また、「三宅□」や「三玄」と読める墨書き土器は、先年御倉跡で発見された「郡（有）家」と書かれた須恵器杯身と同じく当地に役所的な施設の存在を窺わせている。

北萱遺跡から出土した多様で大量の遺物群は、そのほとんどが投棄されたか或いは流された状態で検出されている。その遺物が本来使用されていた場所は発見されておらず、今後の課題となる。後述、当遺跡周辺に発掘調査が行われた時、その答えがわかるかも知れない。

(三宅 弘)

## VI 付 論 —卒塔婆の使用形態についての一考察—

当遺跡より出土した遺物は多様なものであり、これらのうちB IV トレンチの包含層から出土した4本の木製卒塔婆について若干の考察を行ってみたい。

まず、大型の木製卒塔婆3木(38~40)は、葬地に年忌塔婆として立てられたものの流出と考えるのが妥当なのであろうが、北川の洪水などにより土砂が一度に流れ込み堆積した当遺跡の性格を考えると、北川の流れを利用した流灌頂に関連した遺物の可能性も出てくる。

流灌頂とは、妊婦が死亡した場合行われる呪術的葬送習俗で、産死した女性の穢れを水の持つ浄化作用により清めようとするもので、滋賀県野洲郡では難産で母子ともに死んだ時、川の中に卒塔婆を立て、それに長い縄を結びつけ、僧が読経している間に部落の女性が晴着を着て川の中に入り、両手でその縄を洗うという流灌頂が報告されている。<sup>(1)</sup>またこの様な流灌頂の他、単に卒塔婆のみを川の流れに流す「卒塔婆流し」<sup>(2)</sup>流灌頂も存在し、卒塔婆流しが産死者に限らず、死者供養に用いられた可能性も考えられる。

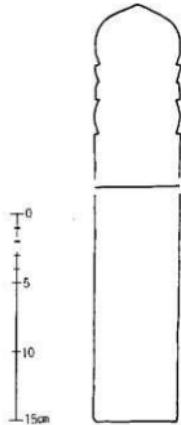
室町時代後期に成立した『七十一番職人歌合』の中に京都の五条の橋の下で覆面をした僧が五輪形の卒塔婆を川に流す様にすすめている姿が描かれており、中世において“卒塔婆流し”が庶民仏教の一習俗として行われていたことを物語り、今回出土した3本の木製卒塔婆についても、この様な習俗に使用された可能性が持たれるのである。

一方、小型の木製卒塔婆(40)は、全長が18.4cmで、墓に立てる年忌塔婆として使用したと考えるには、あまりにも小型である。この小型卒塔婆の使用形態として先に述べた“卒塔婆流し”か、あるいは益行事と関連して行われる“経木塔婆流し”が考えられる。当遺跡に隣接する矢橋地区の浄土宗の檀家では益行事として現在もこの“経木塔婆流し”は行われている。

まず、8月12日から8月13日の間に寺に行き、寺内にある墓で火をたき“龕”(カリク・阿弥陀如来を意味する)と先祖の名前の書かれた経木塔婆をもらって家に帰り、仏壇の前に作った棚に供物をそえて祀る。8月14日には棚詮が行われ、8月16日の夕方、川に供物と共に盆の間祀った経木塔婆を流す。これが現在の益行事であり、流す塔婆も出土した小型卒塔婆にくらべ大型である。また、この様な益行事と同様なものが中世に行われていたかどうかは疑問がもたれるが、この小型卒塔婆の使用形態を考える場合の一つの視点になると思われる。さらに、この小型卒塔婆の形状のみから考察するのであれば、五輪塔状の頭部形態を有する“こけら経”<sup>(3)</sup>“笠塔婆”が紹介されており、これらの中世仏教の遺物との関連を考えつつ検討する必要もあるであろう。

以上、今回出土した4本の木製卒塔婆について考える場合、北川の流れといふものに注目してみる必要があるのであろう。さらに、B IV トレンチの包含層の一層下の旧河道より、人形も出土しており形代を流水に投することにより祓い清める“人形流し”的信仰に、中世仏教思想が融合され、新たな民間信仰、庶民仏教へと発展していく一つの過程にこれらの卒塔婆が位置づけられる可能性もあるのである。また、同じB IV トレンチの包含層からは“こけら経”も出土しており、今後さらに総合的な調査研究が望まれる。

(秋政久裕)



第10図 現行の卒塔婆実測図

注

- (1) 大塚民族学会編『日本民俗事典』(弘文堂 1972年) 515ページ
- (2) 佐々木孝正「流灌頂と民俗」(『講座日本の民俗宗教』2 仏教民俗学) 弘文堂 1980年
- (3) 「元興寺極楽坊」『日本佛教民俗基礎資料集成』第六卷 中央公論美術出版 1975年

# 図 版



A トレンチ上層全景



A トレンチ上層査



A トレンチ下層全景



B III-1 トレンチ小型丸底壺出土状況



B II-1 トレンチ上層旧河道 2



B II-1 トレンチ下層旧河道 1



B II - 1 トレンチ上層旧河道 2



B II - 1 トレンチ下層旧河道 3 及び土地



19



20



21



22



23



24



25



26

B IV トレンチ田河道 1 出土土器



39



40



41



42



43



44



45



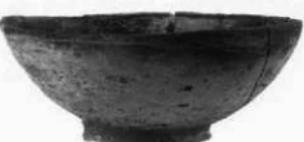
46



47



48



49

39~69 BⅦトレンチ旧河道1出土土器 78 BⅦトレンチ旧河道2出土土器 129 Aトレンチ溝出土土器



151



152



153



154



155



156



157



158

151 B II - 1 トレンチ土塙SK-89出土土器 152~160 B II - 1 トレンチ旧河道2出土土器



161



163



164



165



166



168



171



173

161~173 B II-1 トレンチ旧河道2出土土器



174



175



176



182



186



187



207



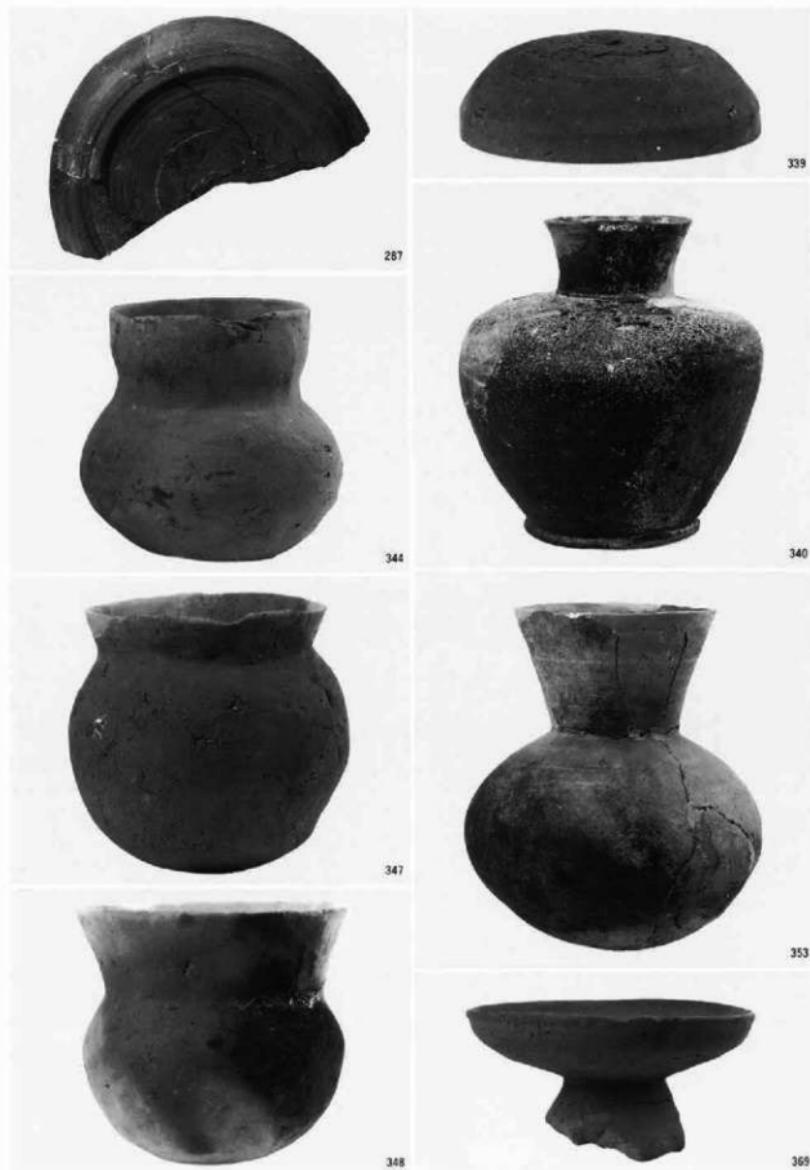
192



275

174~182 B II - 1 トレンチ旧河道 2 出土土器 186~192 B II - 1 トレンチ旧河道 1 出土土器

207~275 B II - 1 トレンチ包含層出土土器



287 B II - I トレンチ包含層出土土器 339~340 B II - I トレンチ旧河道 2 出土土器  
344~369 B II - I トレンチ旧河道 1 出土土器



349



354



357



366



370



374



378



375



380

349~380 B II - 1 トレンチ旧河道1出土土器



382



384



383



385



386

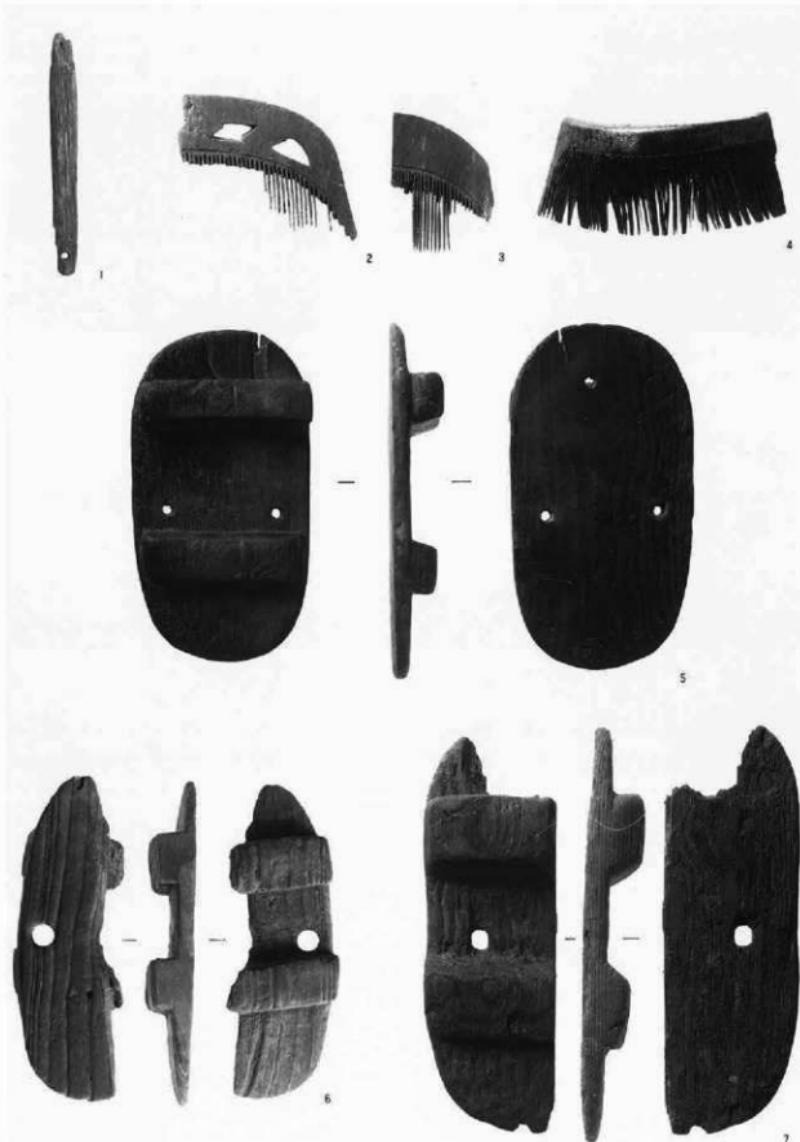


387

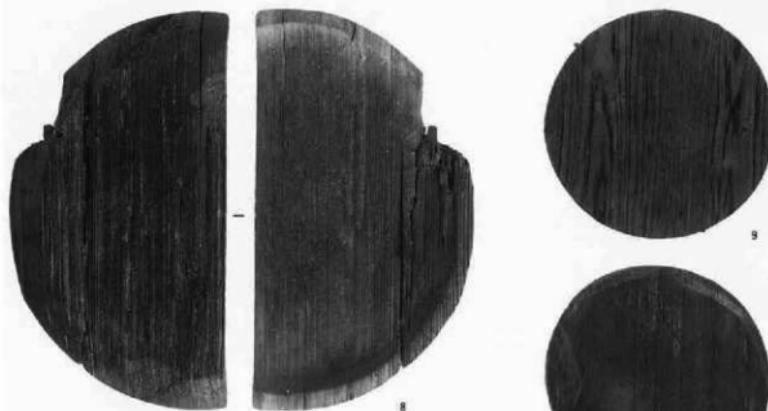


388

382~388 B III-1 トレンチ旧河道1 出土土器



1~4 衣(服飾具) 5~7 衣(はきもの)



8



9



10



11



12



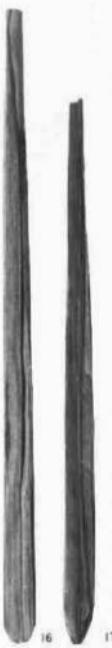
13



14



15



16

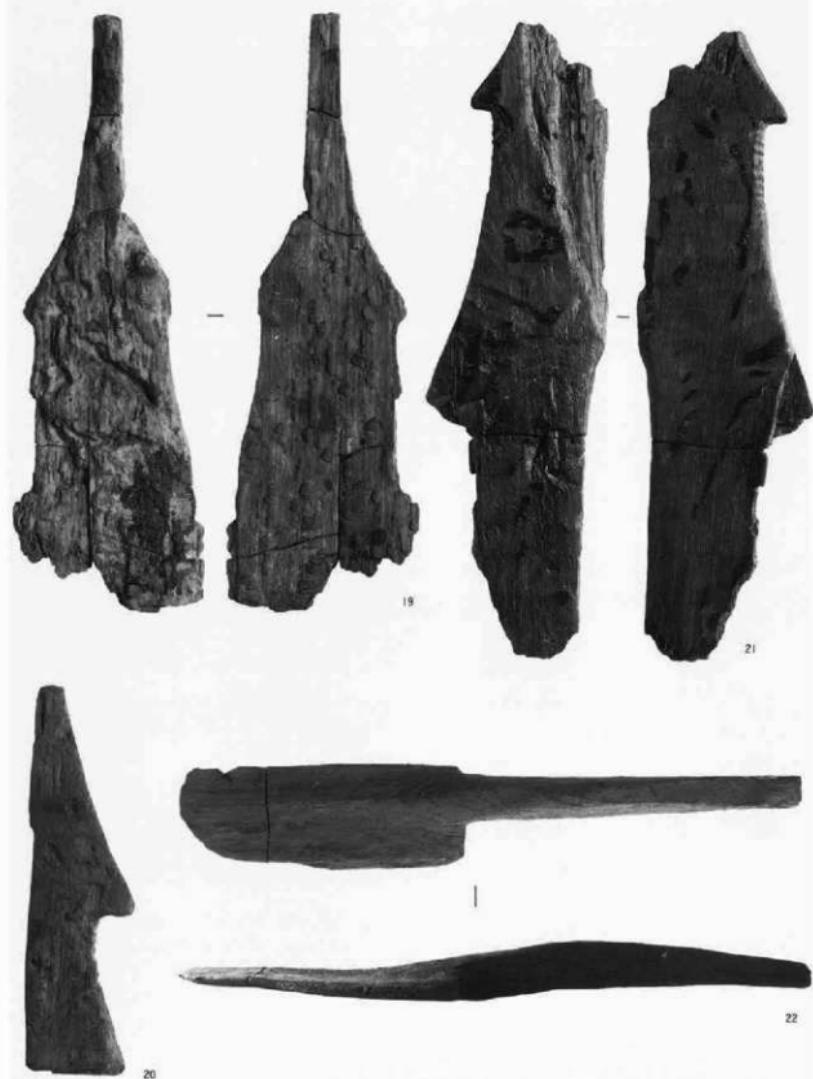


17



18

8 食(調理調整用具) 9~17 食(飲食器) 18 住(住居)



19~22 農耕(耕作用具)



23



24



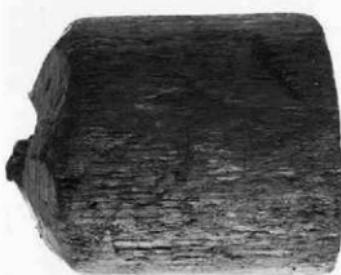
25



26

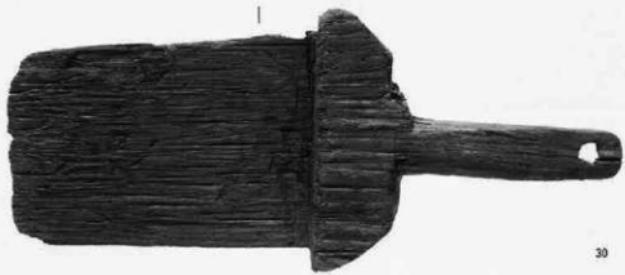


27



29

23 農耕(耕作用具) 24~28 農耕(調整用具)



30

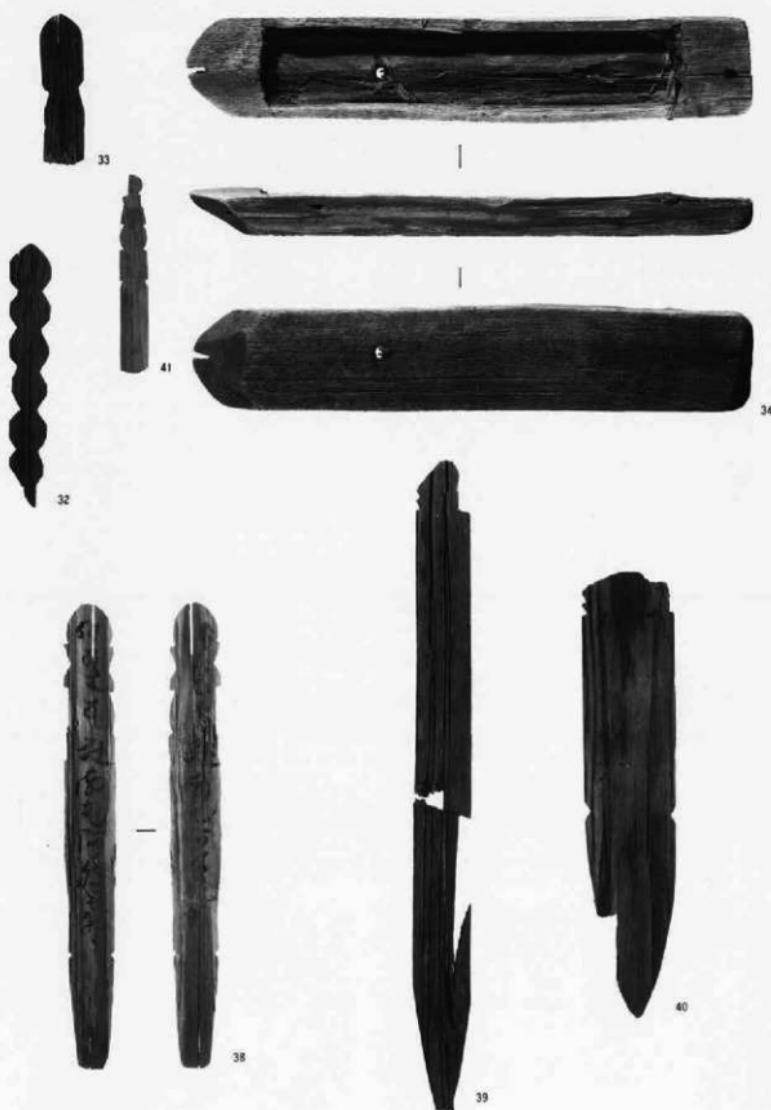


29

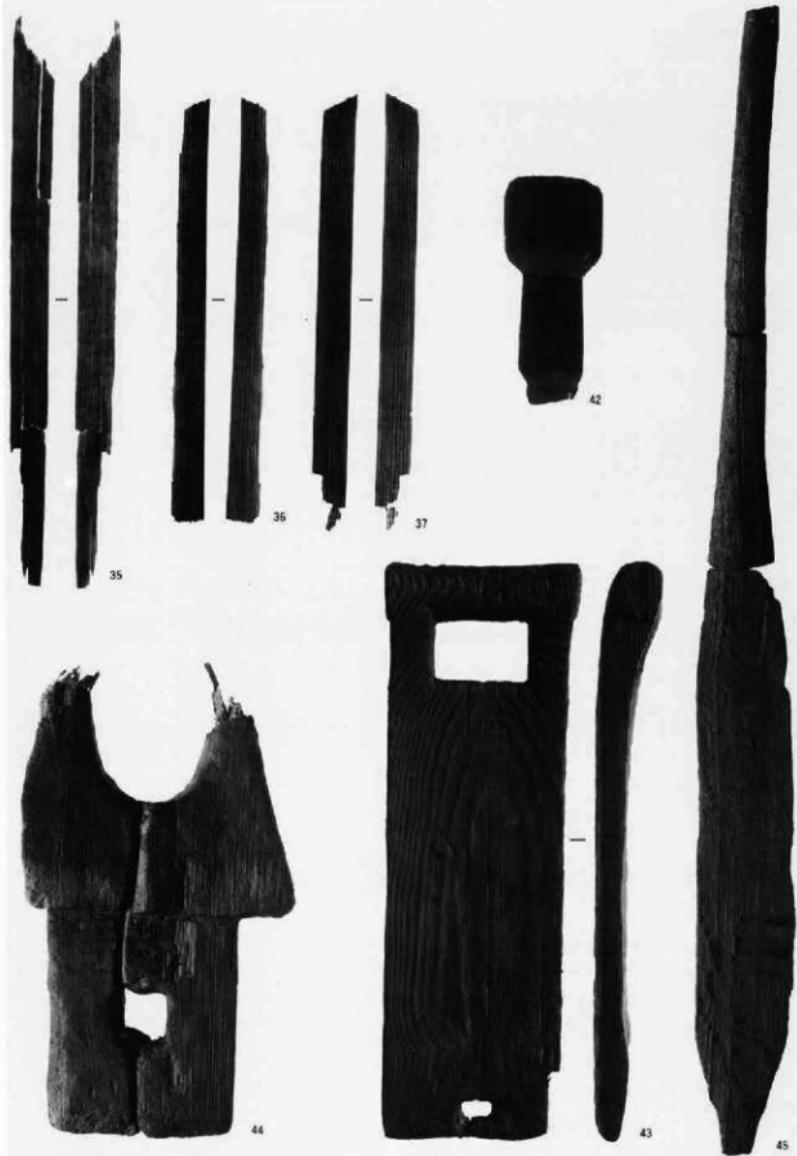


31

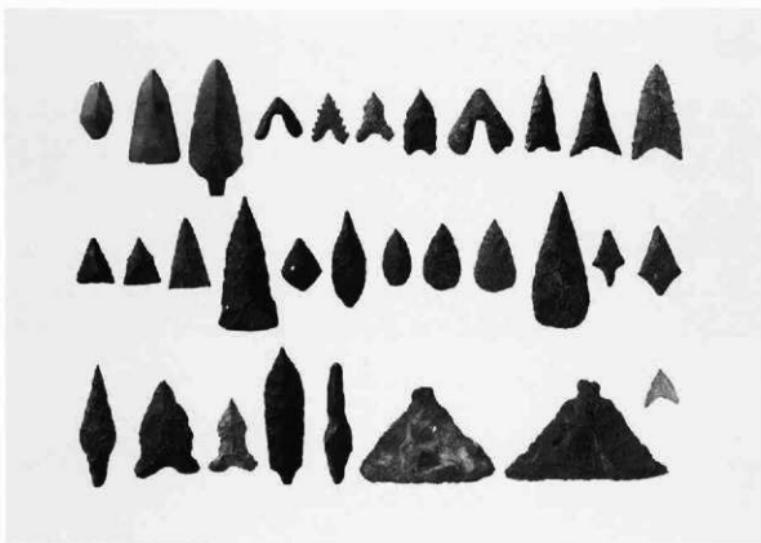
29~31 漁撈(船)



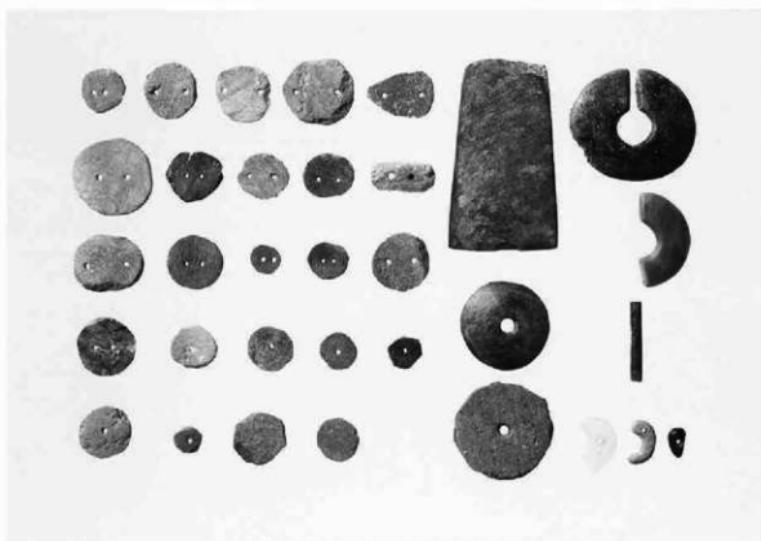
32~34 信仰(祈願品類) 38~41 人の一生~通過儀礼~(葬送用具)



35~37 人の一生～通過儀礼～(葬送用具) 42~45 不明品



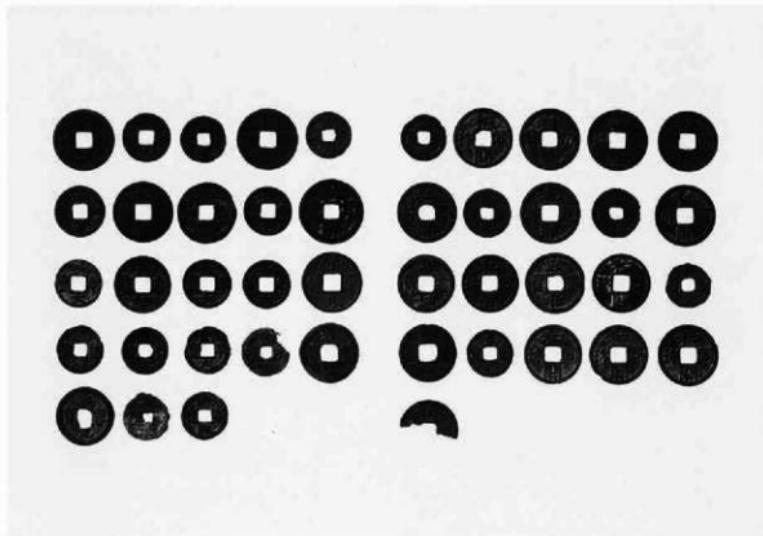
石錐他



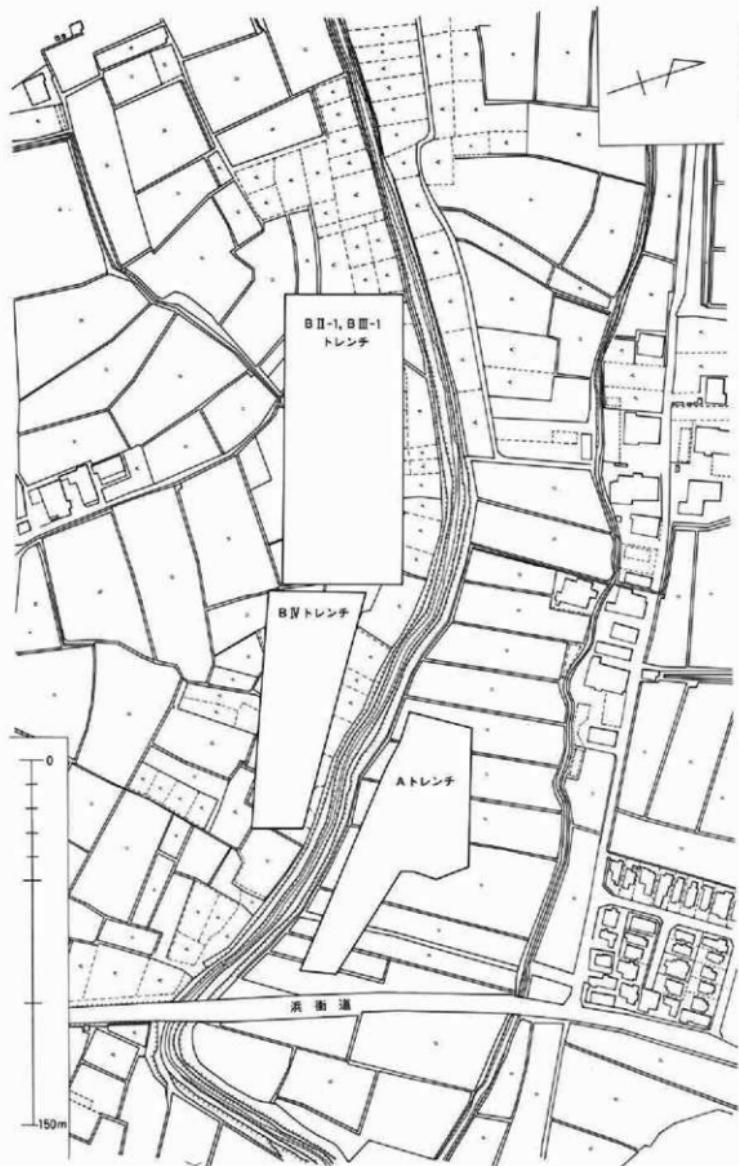
石製品



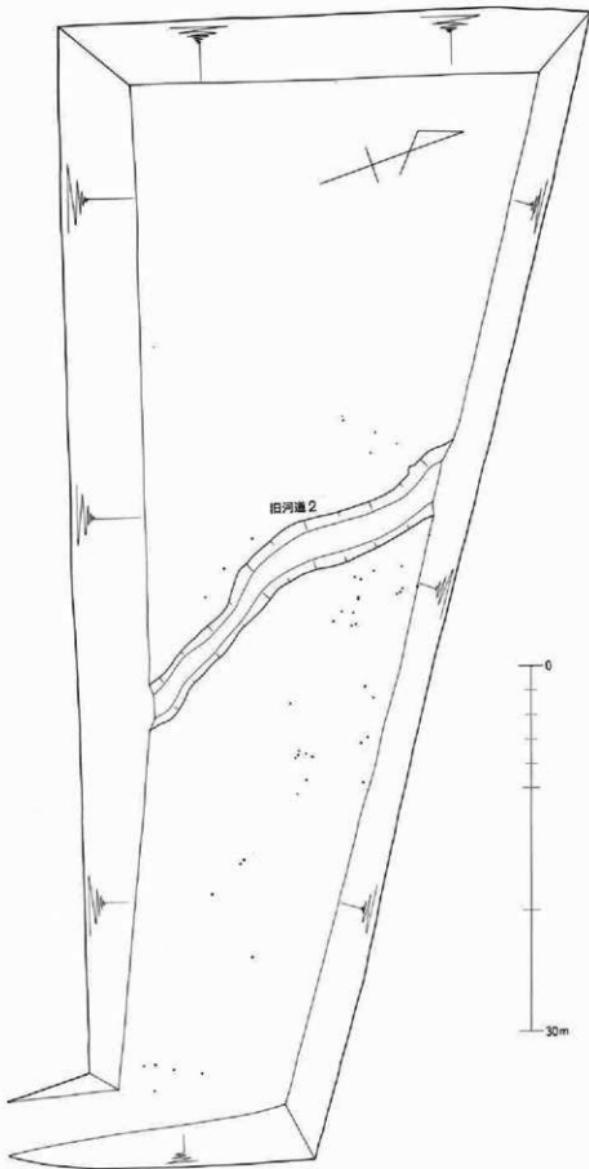
土 錢



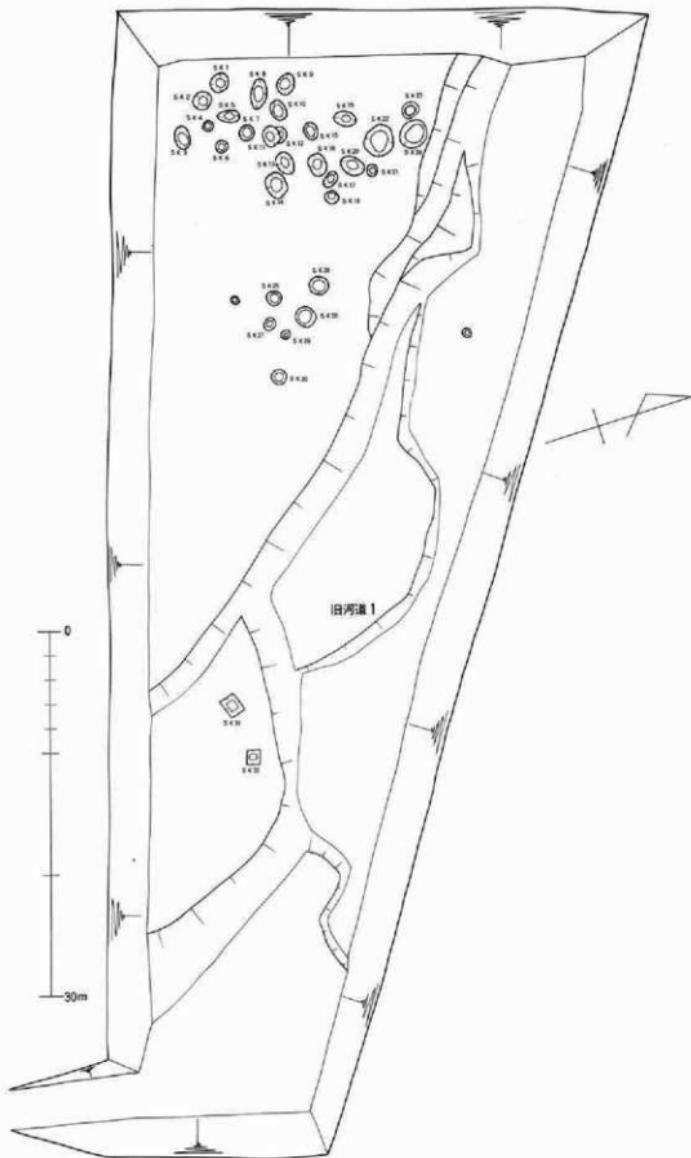
古 錢



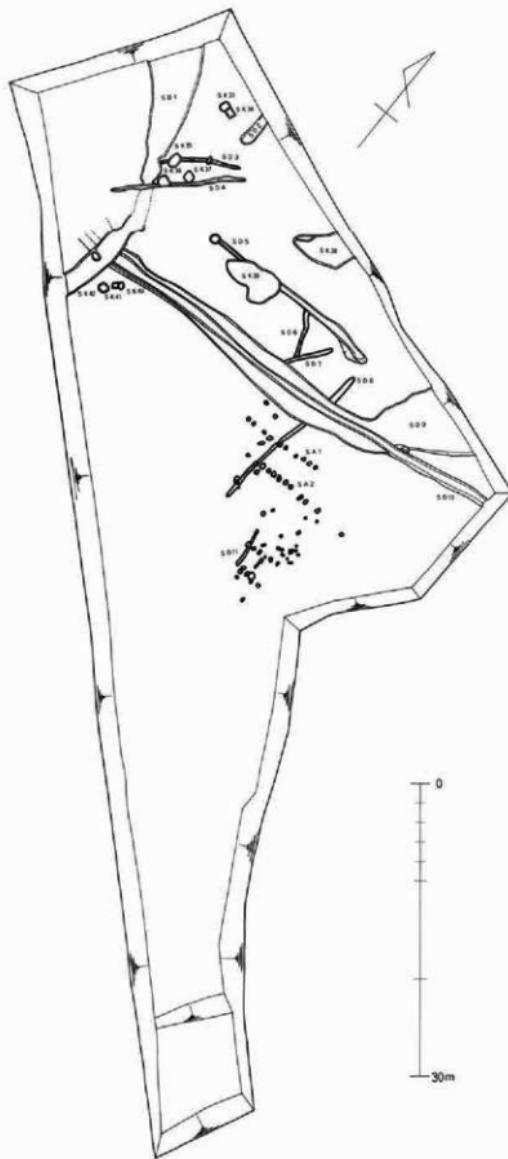
トレンチ位置図



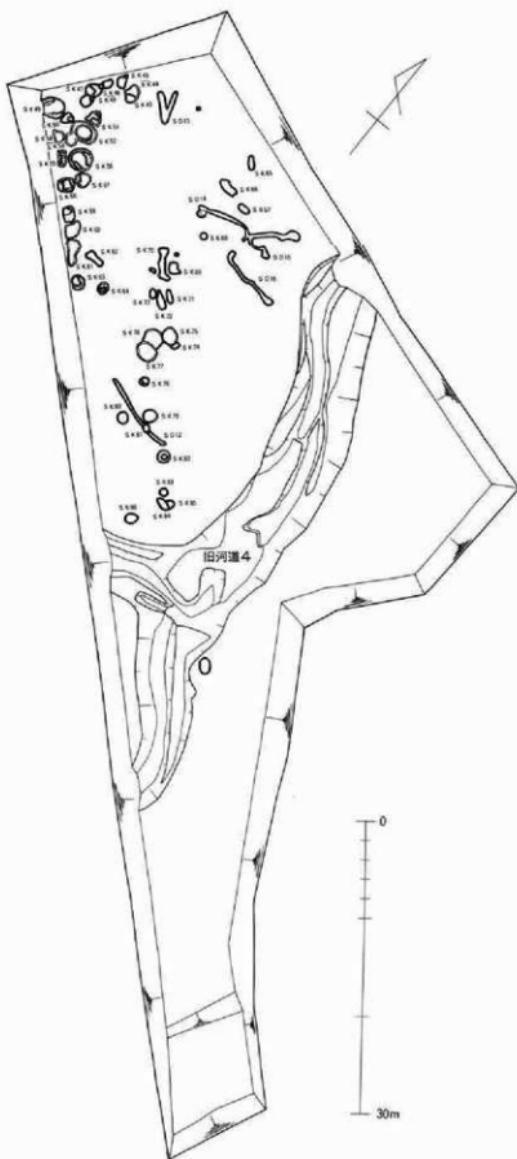
BⅣトレンチ上層造構実測図



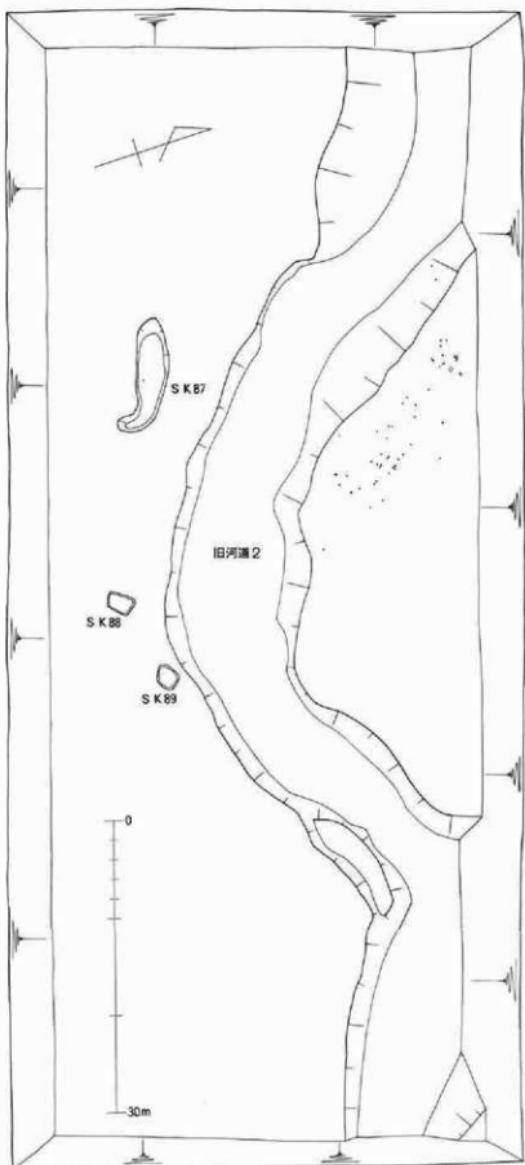
B IV トレンチ下層造構実測図



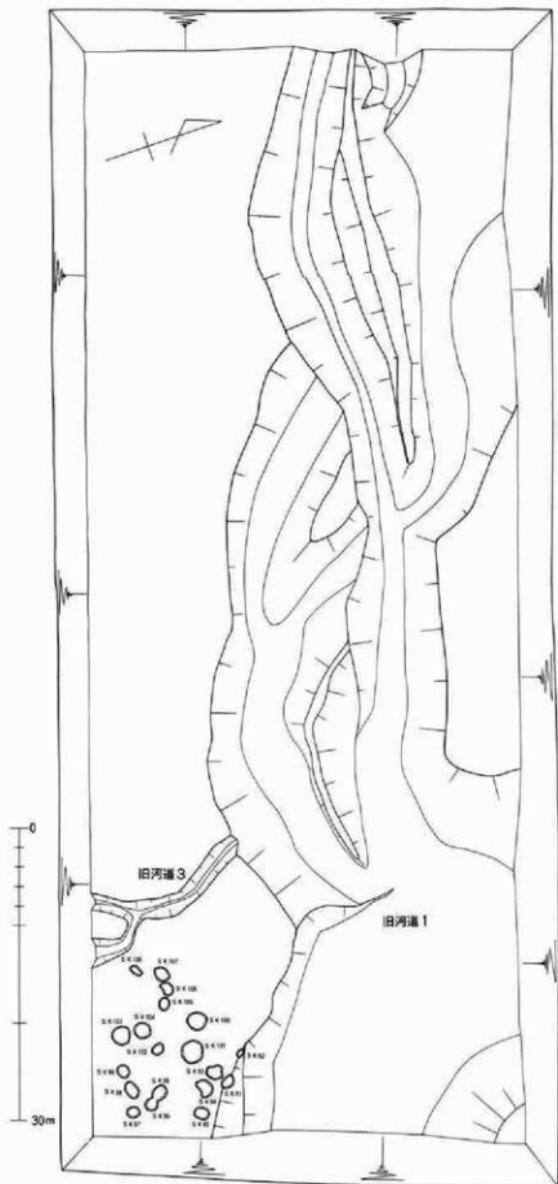
A トレンチ上層遺構実測図



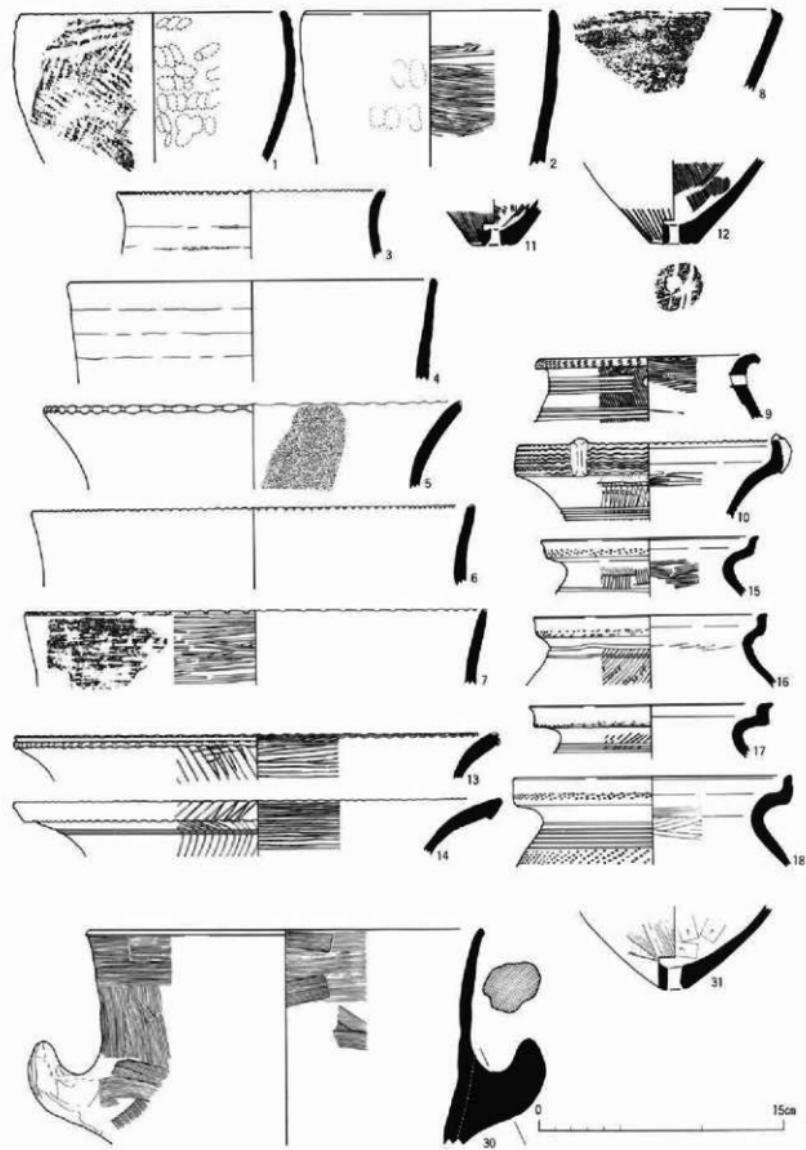
A ドレンチ下層造構実測図



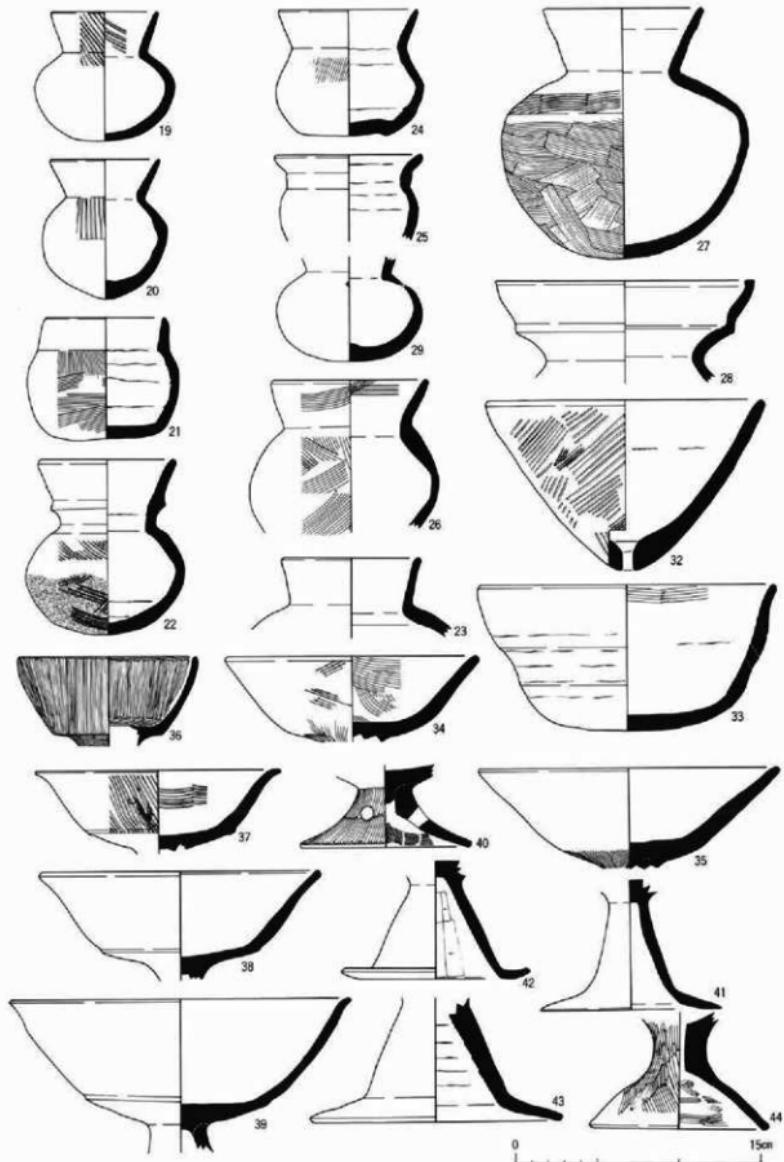
B II-1, B III-1 トレンチ上層遺構実測図



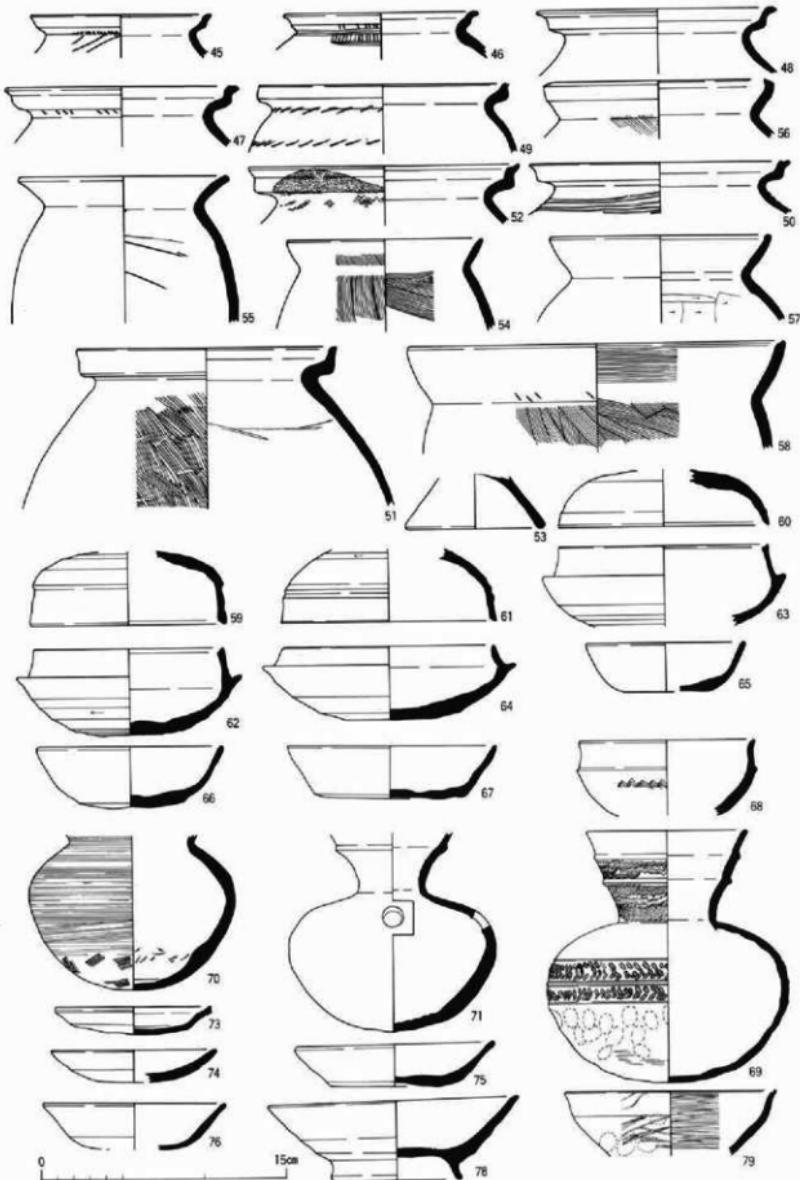
B II-1, B III-1 トレンチ下層造構実測図



B IV トレンチ旧河道1出土土器実測図



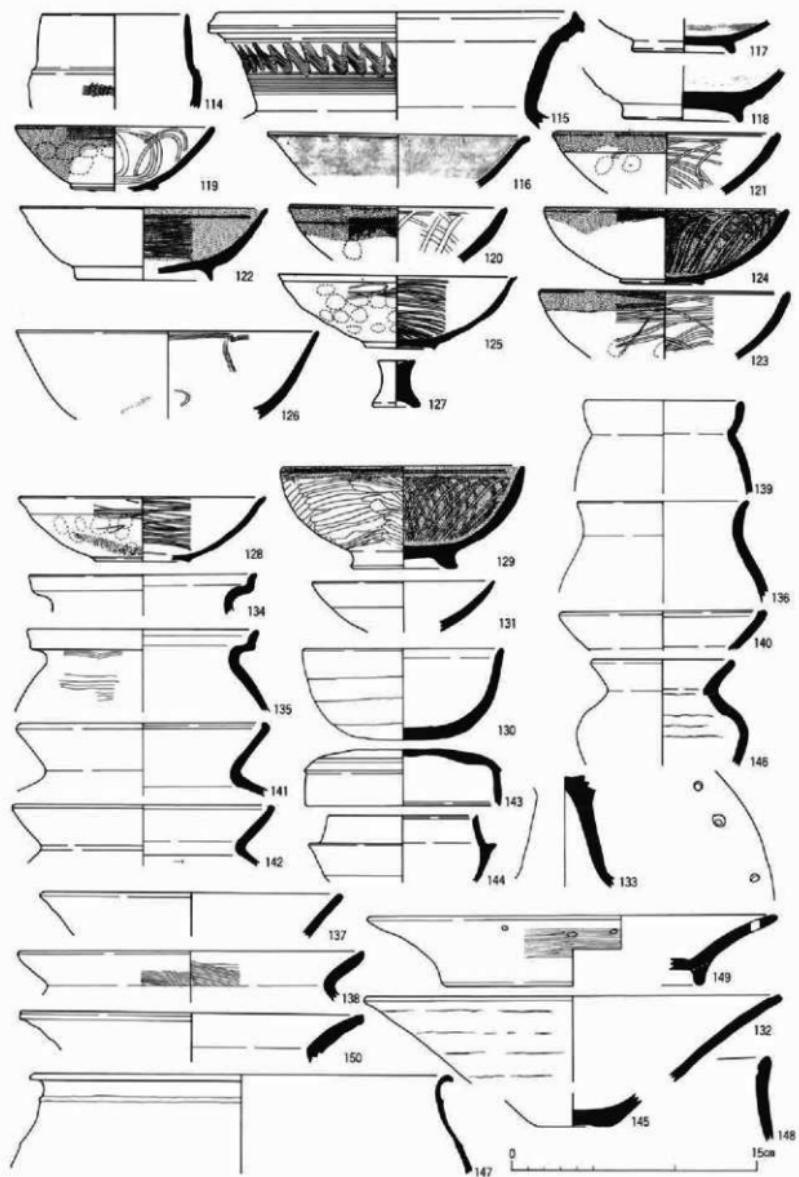
B IVトレンチ旧河道1出土土器実測図



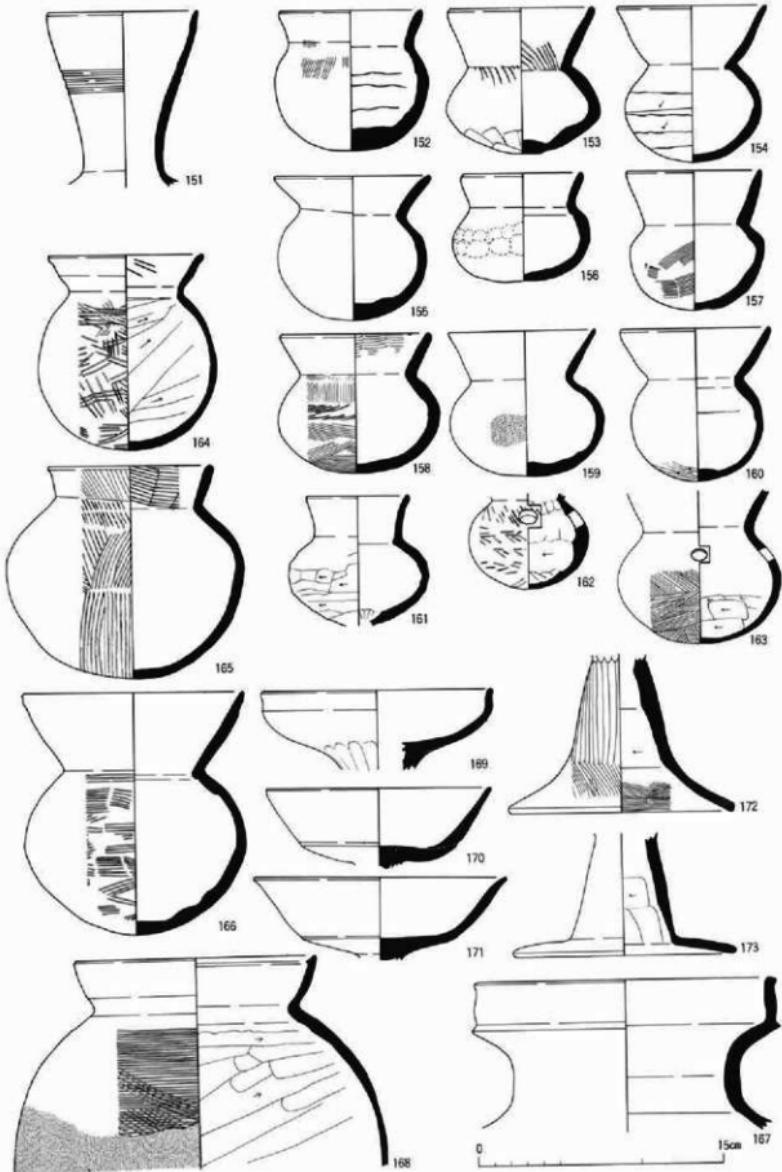
B IV ブレンチ旧河道 1・2 出土土器実測図



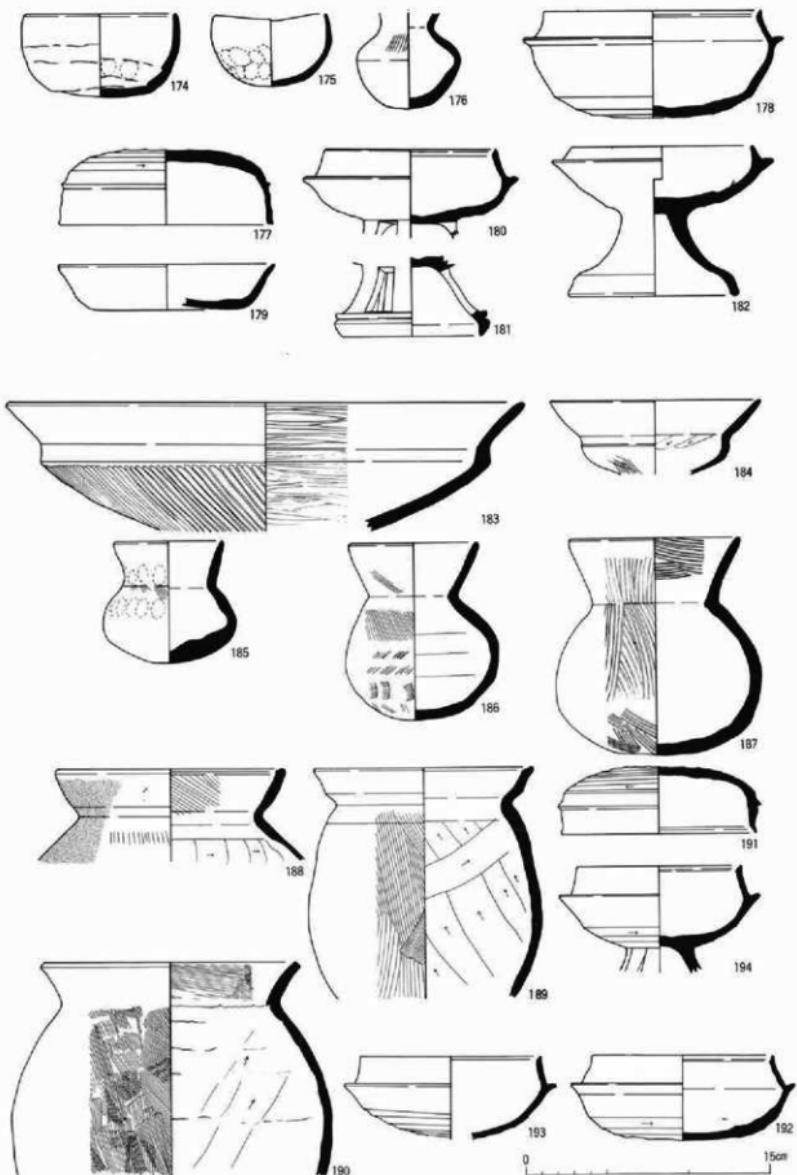
Bihoro Trench Old Riverbed 2, Inclusion Layer Pottery Survey Map



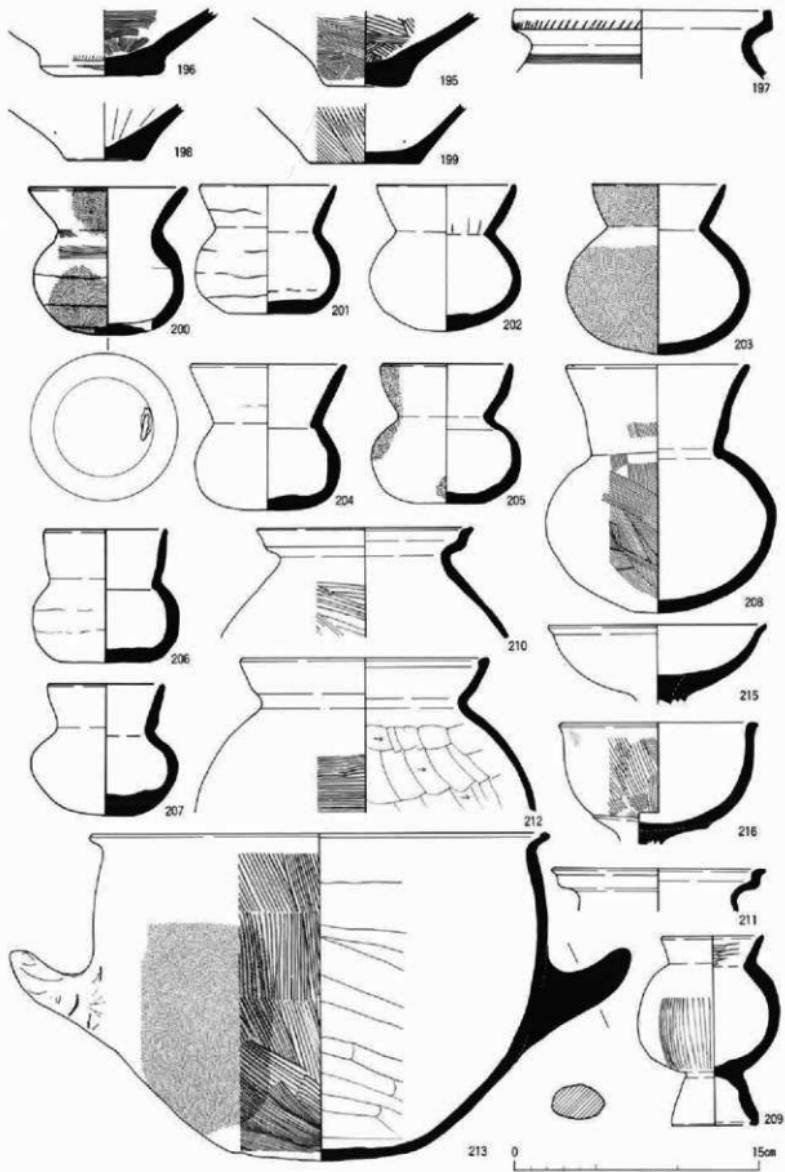
BNトレンチ包含層、Aトレンチ、SK6、SD5、SD9、SD10、SD12下層包含層出土土器実測図



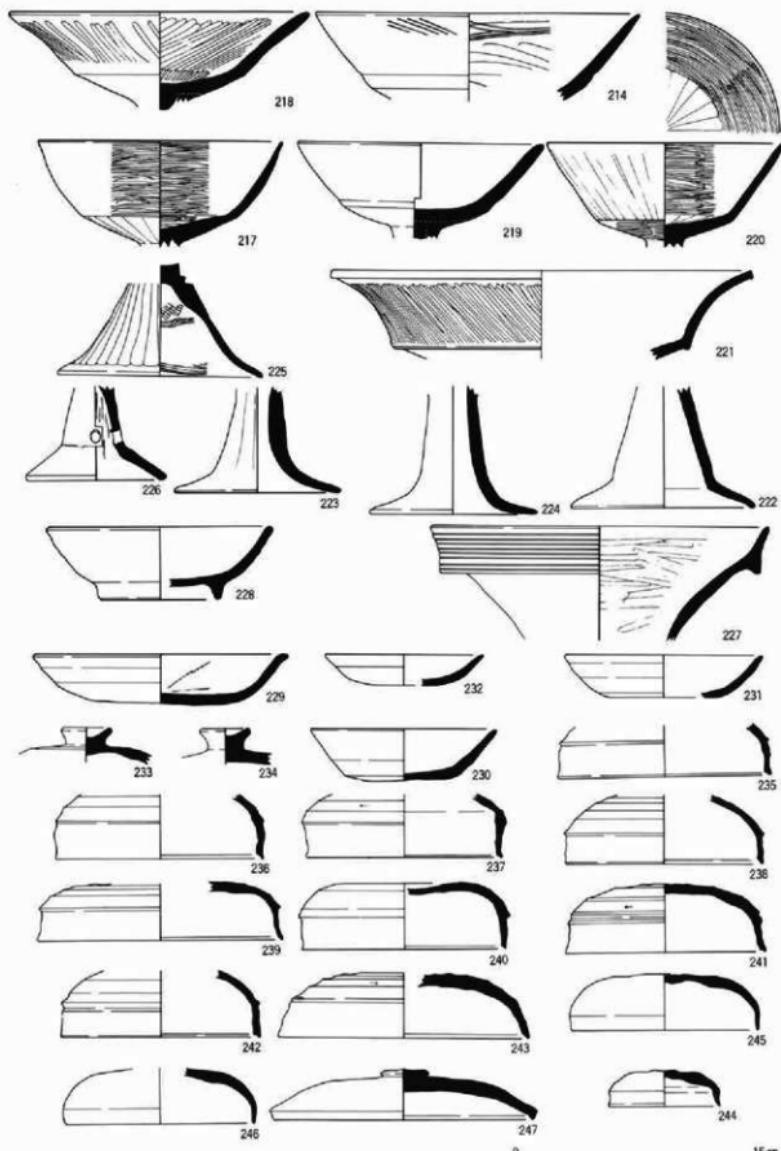
B II-1 トレンチ, SK89・旧河道2出土土器実測図



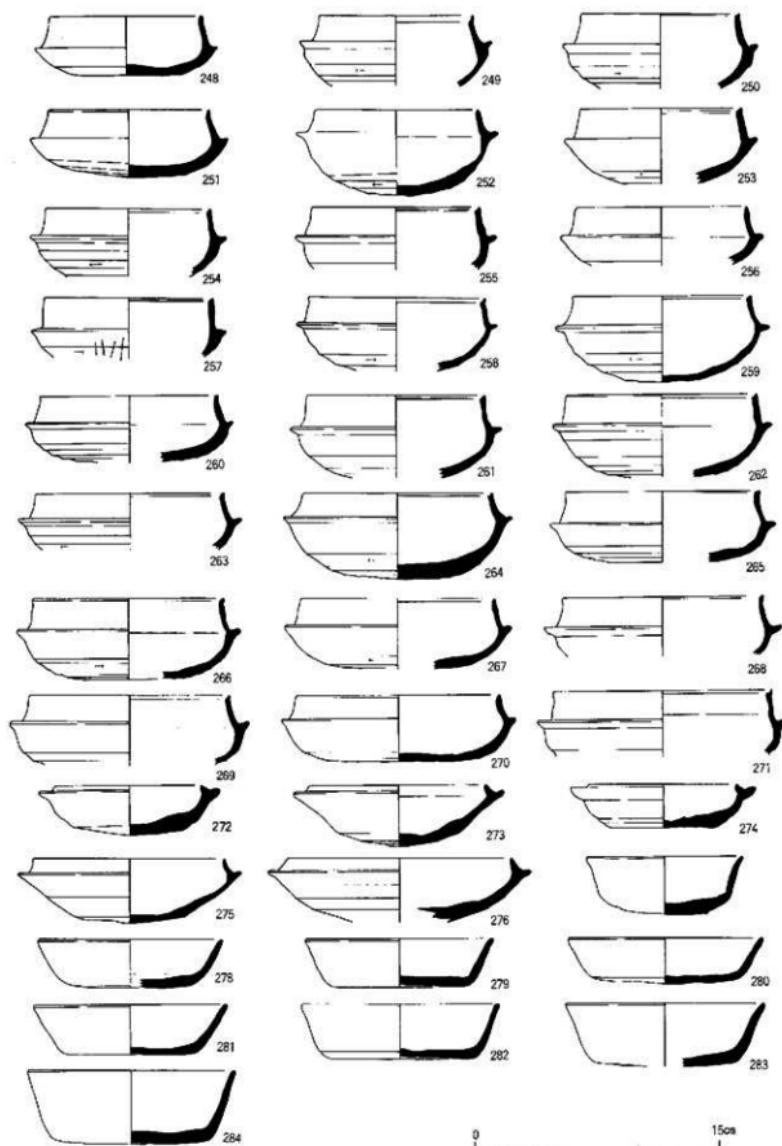
B II-1 トレンチ旧河道1・2出土土器実測図



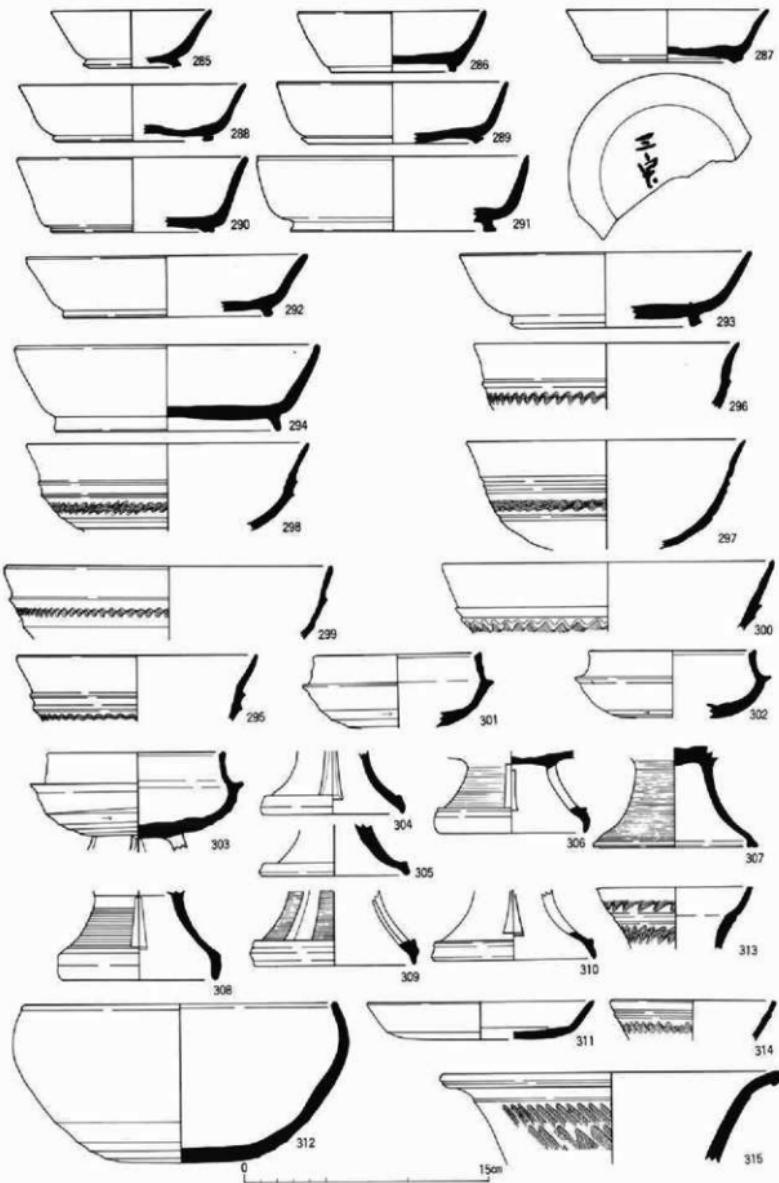
B II-1 トレンチ包含層出土土器実測図



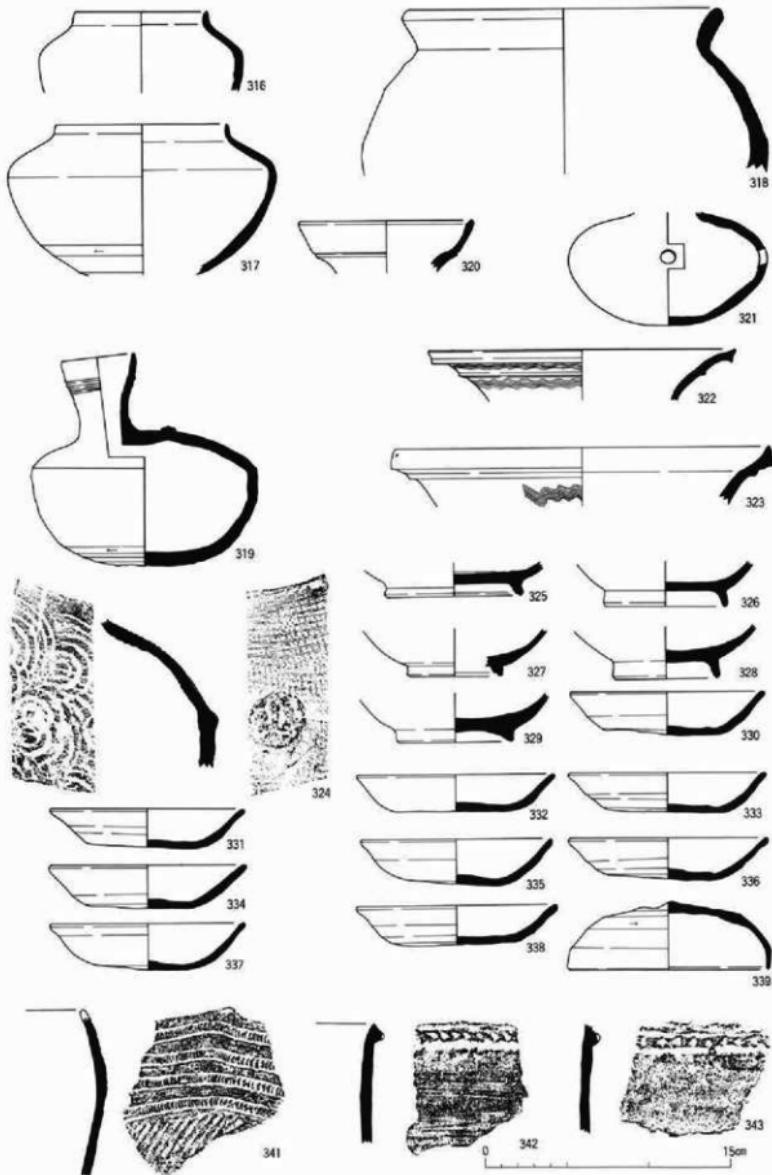
B II-1 トレンチ包含層出土土器実測図



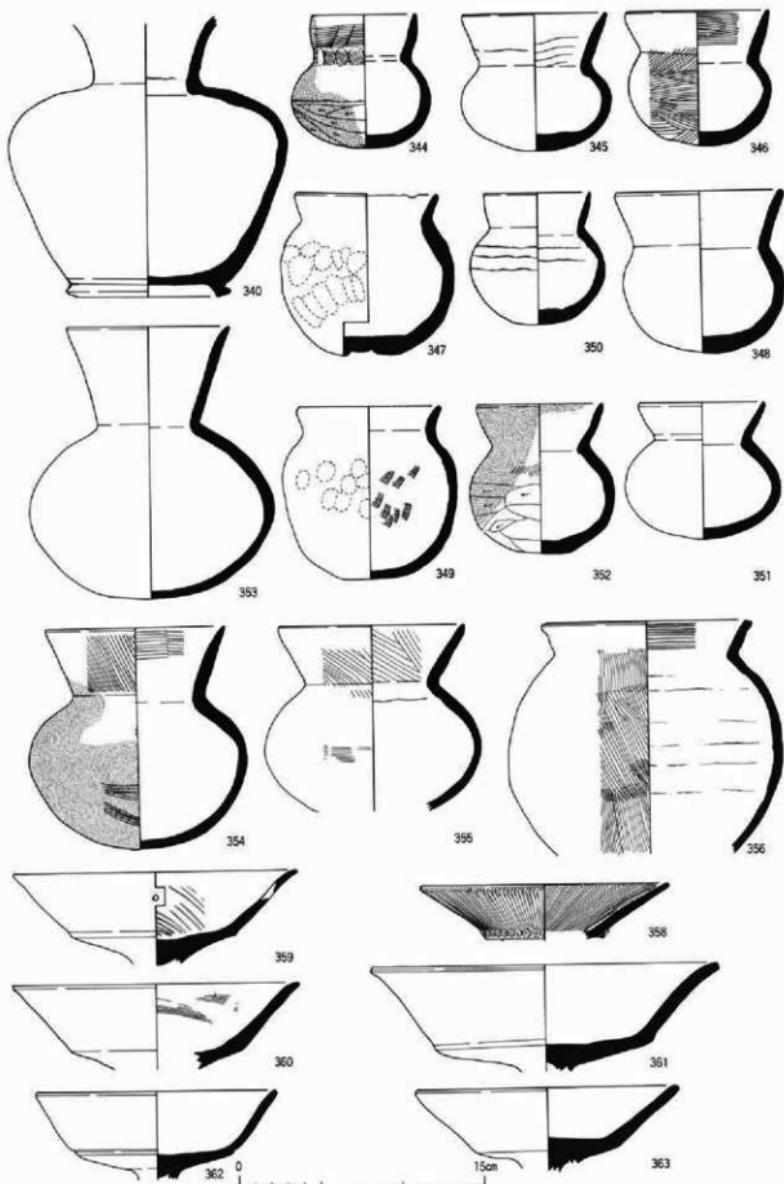
BII-1 トレンチ包含層出土器物図



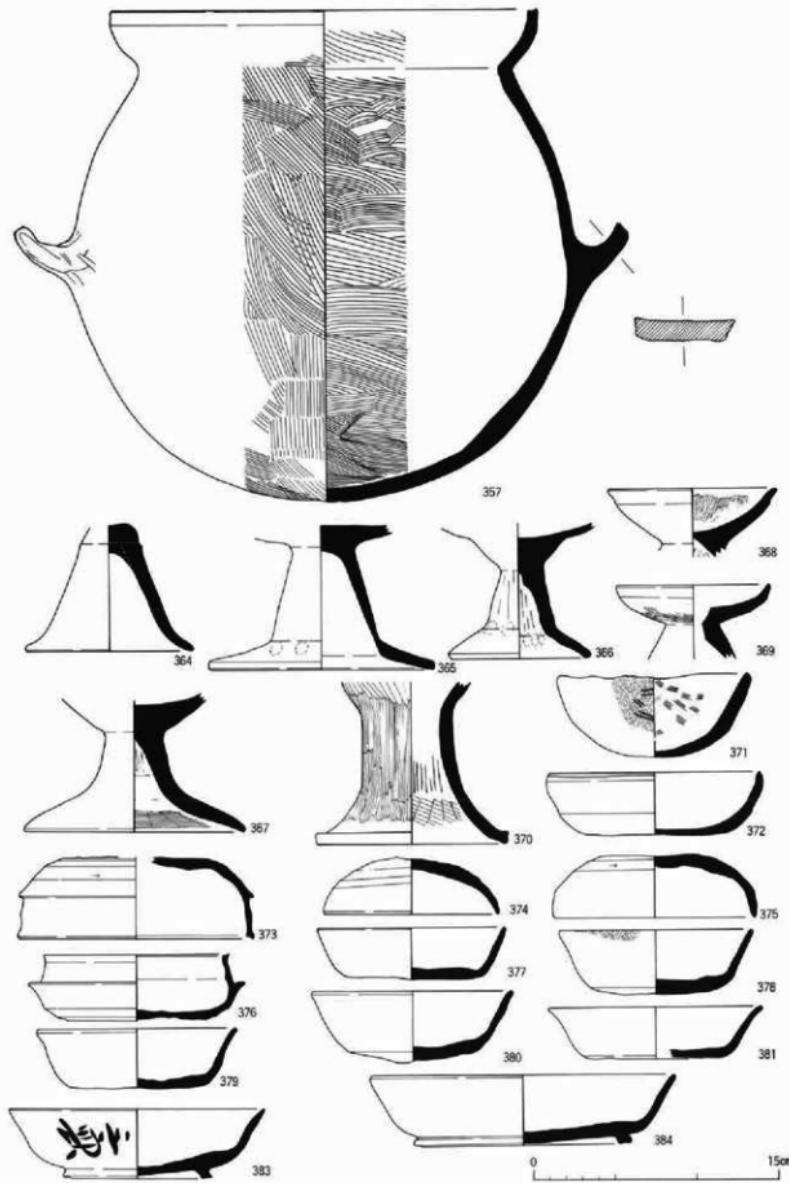
B II-1 トレンチ包含層出土土器実測図



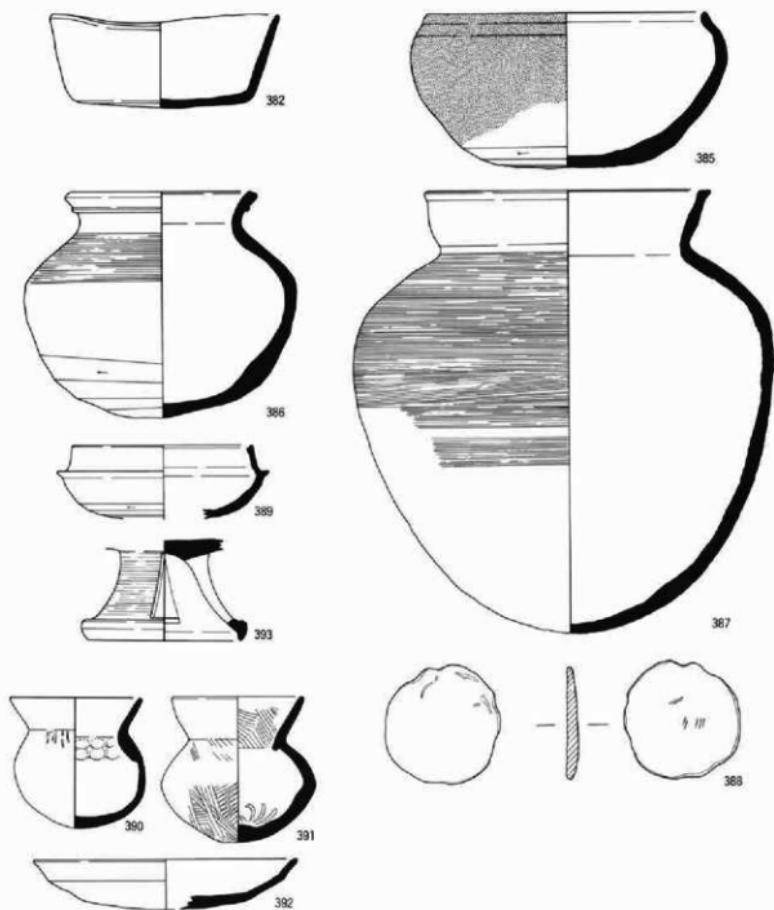
BII-1 トレンチ包含層, BIII-1 トレンチ旧河道2出土土器実測図



B III-1 トレンチ旧河道 I・2出土土器実測図

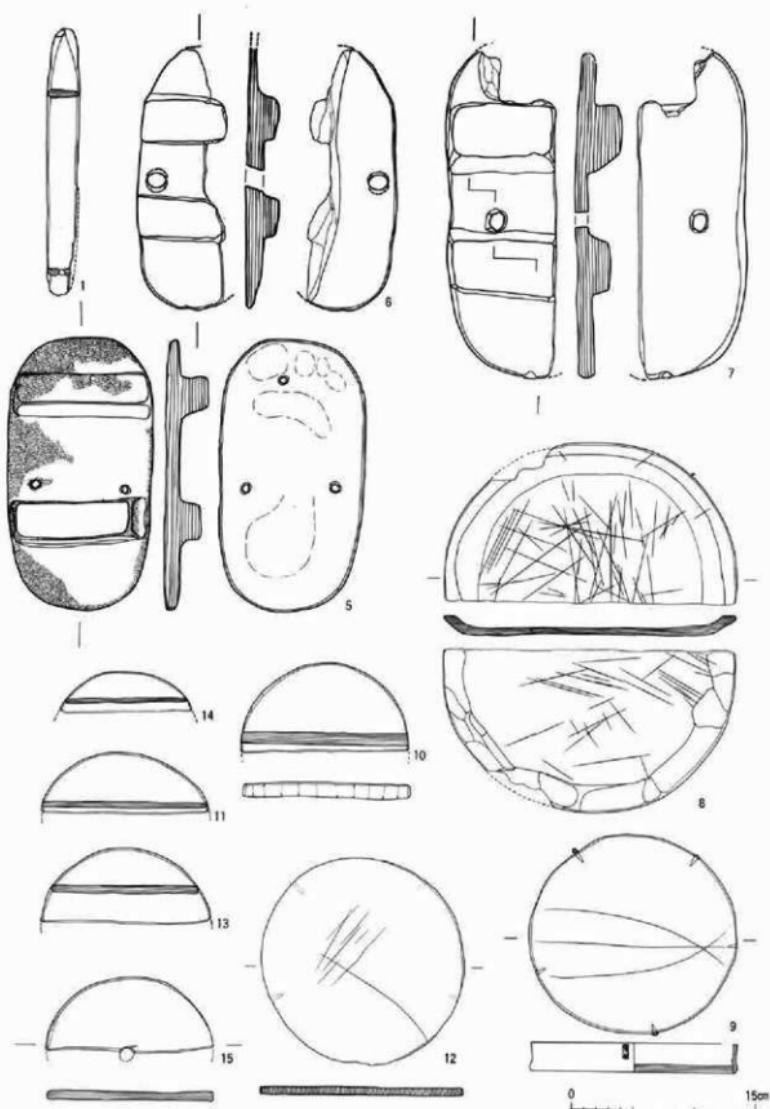


B III-1 トレンチ旧河道出土土器実測図



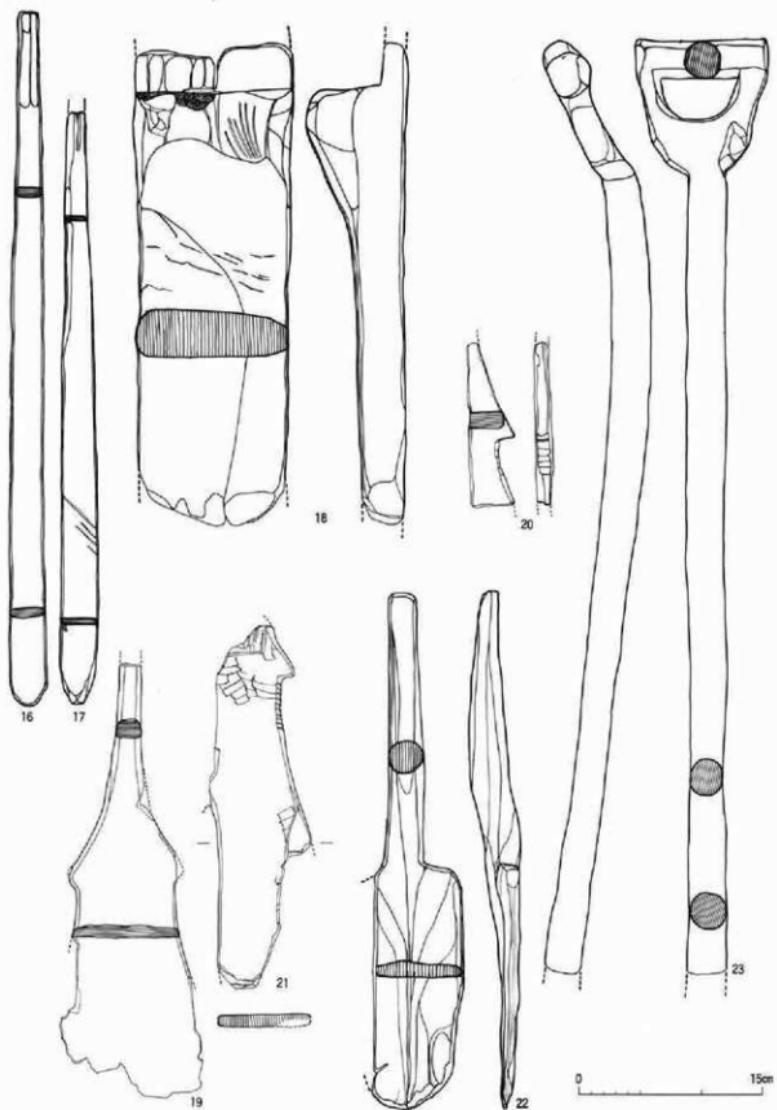
0 15cm

BIII-1 トレンチ田河道1・3, 包含層出土土器実測図



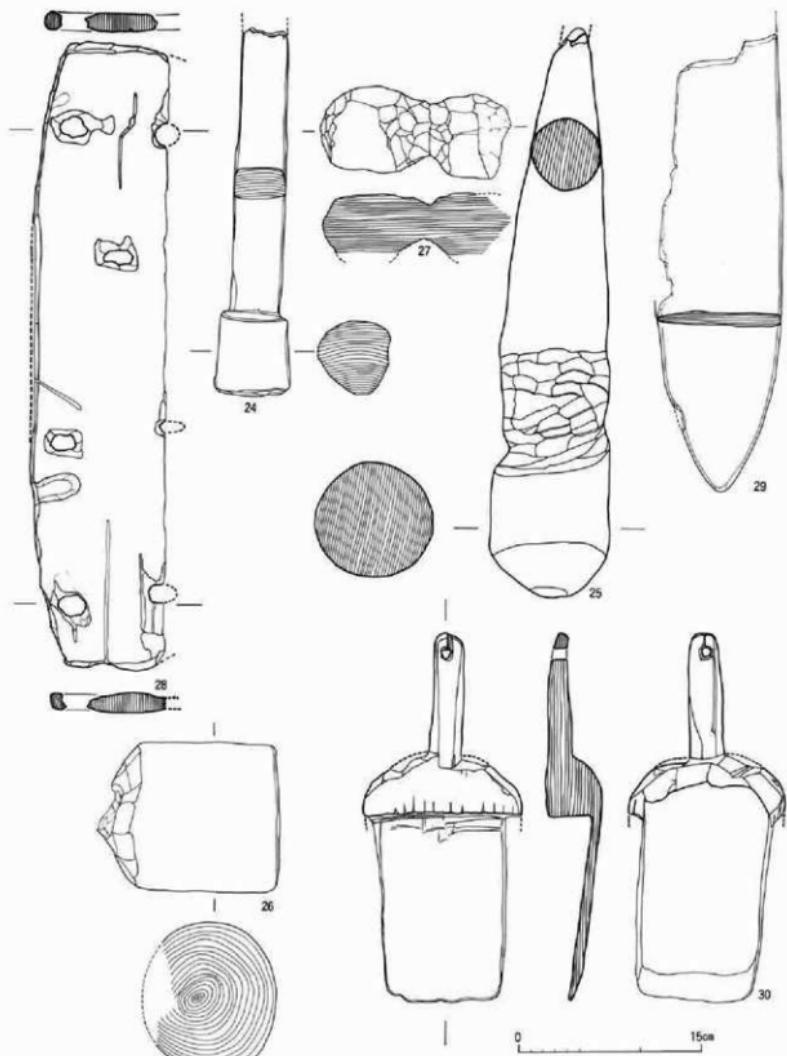
木器実測図

1(服飾具) 5~7. 衣(はきもの) 8. 食(調理の調整用具) 9~15. 食(飲食器)



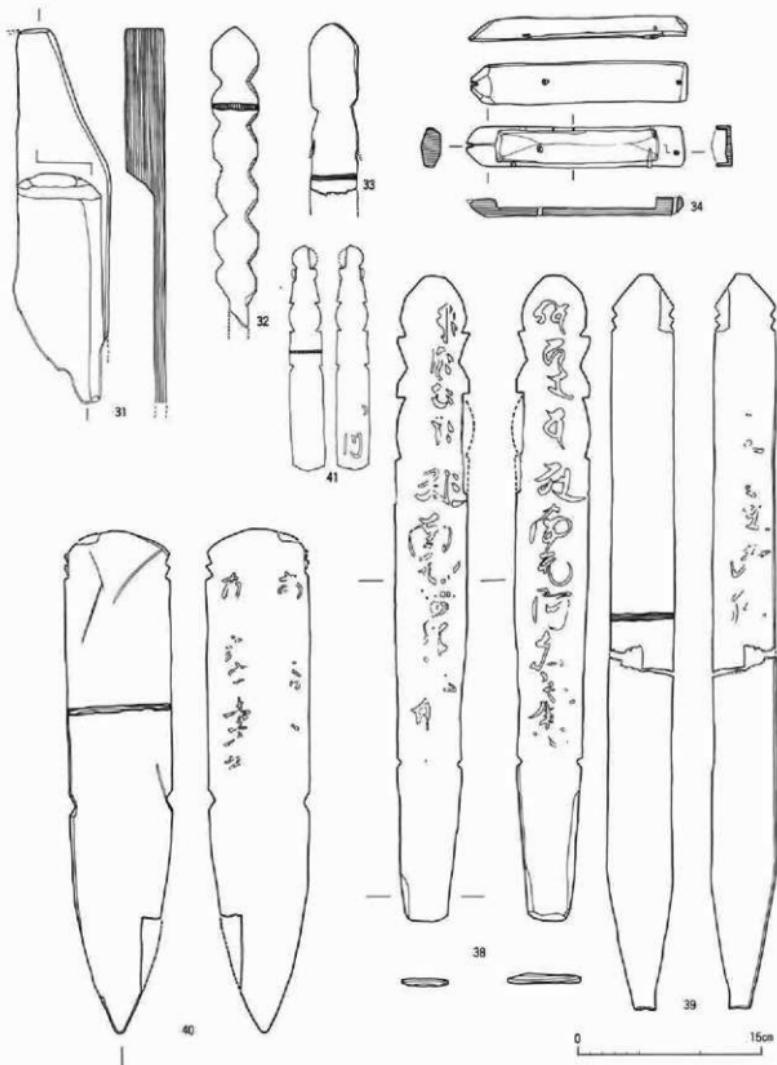
木器実測図

16・17. 食(調理・調理用具) 18. 住(住居) 19~23. 農耕(耕作用具)



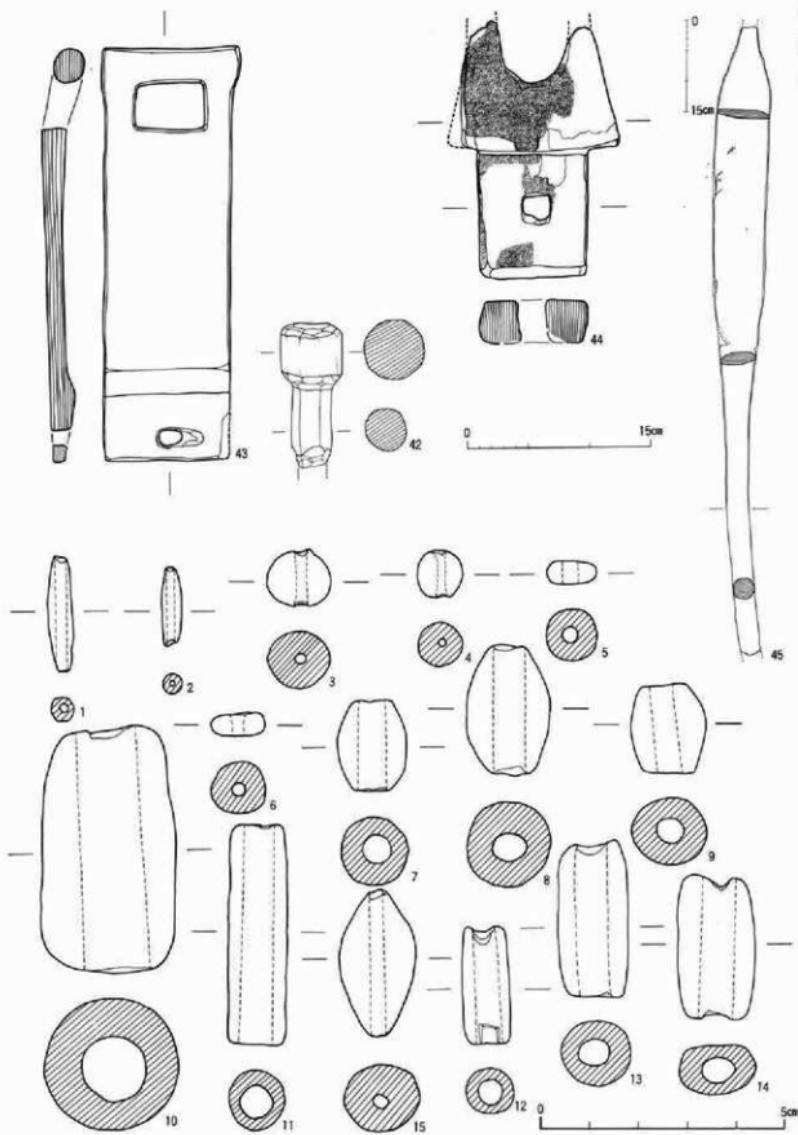
木器実測図

24~27. 農耕(調整用具) 28. 農作用具 29~30. 漁撈(船)

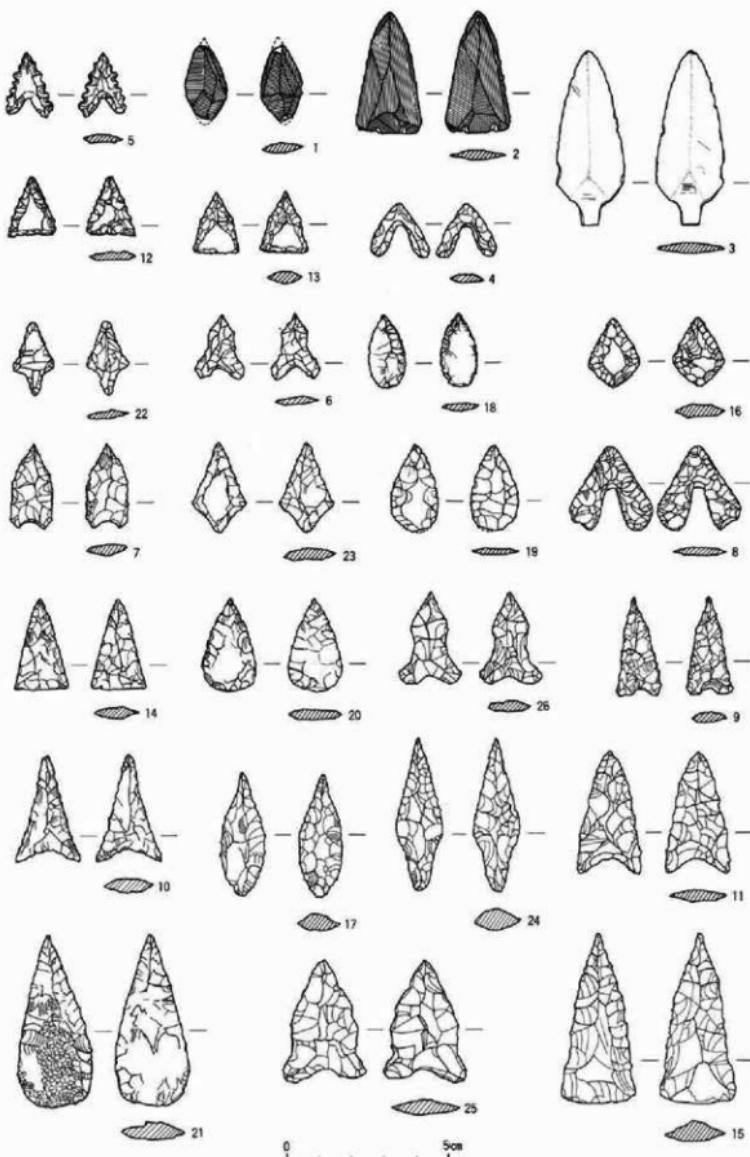


木器実測図

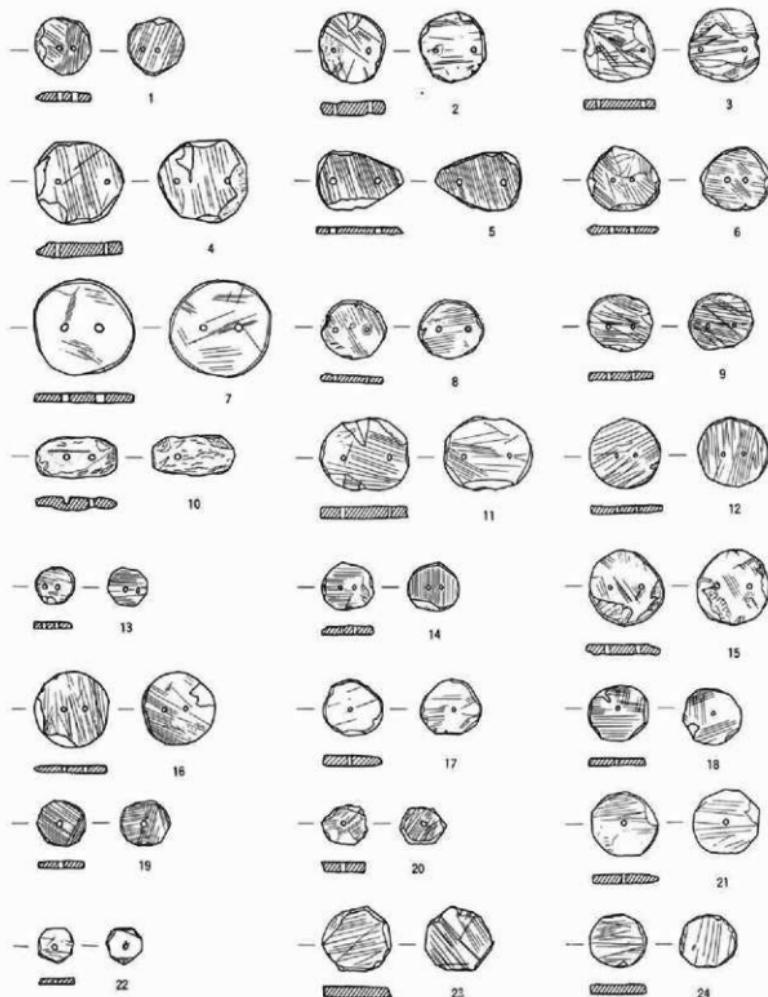
31. 漁船(船) 32~34. 信仰(祈願品類) 38~41. 人の一生—通過儀礼(葬送用具)



木器(42~45)不明品・土鍬実測図

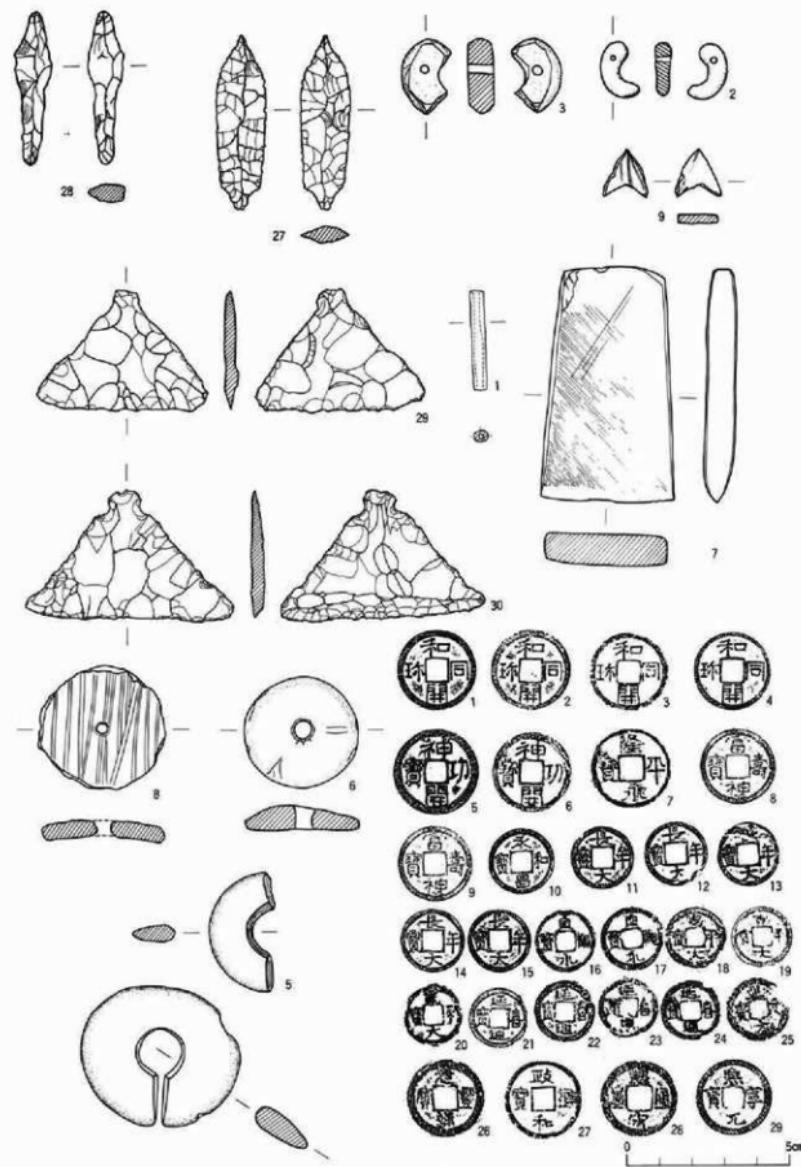


石器實測圖



0 5cm

有孔圓板實測圖



石器・土製品・古錢實測圖

昭和62年3月25日

草津川改修事業に伴う埋蔵文化財

発掘調査概報2

—御食・北畠地区—

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 351-6034